家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十二巻　第二号

幼児を 交通事故から 守りましょう

2

日本幼稚園協会

幼児のための紙芝居です

●'62年度幼児テキスト紙芝居全集第11回配本中

ぴんきー のまめまき

¥ 350　画・森国トキヒコ

どうぶつ しょうぼうたい

¥ 350　画・伊藤悌夫

幼児の発達に即した
よいこの掛図下巻

監修・平井信義

¥2300　A全版　上質紙16

東京都渋谷区千駄ケ谷5—17
TEL (341)3400・3227・1458
振替東京 29855
株式会社 教育画劇

新製品ご紹介

■だれにもできて　たのしめる

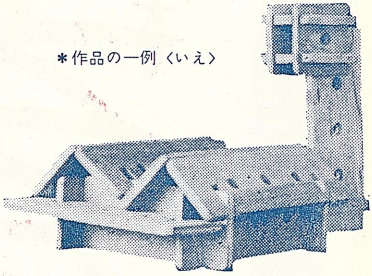
キンダー　くみいた あそび

いろいろな板の切りこみを　かみ合わせていくだけの　やさしい遊び……

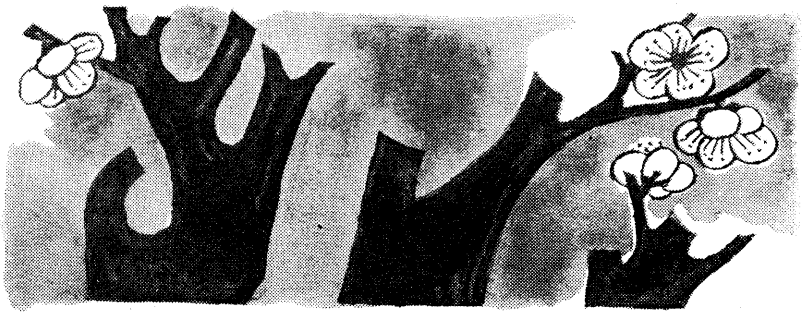
幼児の自由な創造力や造形力を養います。実用新案出願中

集団用(大型・18,000円)と個人用(小型・1,800円)があります。

＊作品の一例〈いえ〉



発売　フレーベル館



幼児の教育　目次

――第六十二巻　二月号――

表紙　初山　滋

現地にみる欧米の幼児教育……荘司雅子…(2)
幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか
＊社会的遊びを主とした問題……黒田成子…(9)
＊幼稚園卒業期の子どもの劇あそび……村石京子…(19)
＊運動を主とする遊びの問題の面で……岡本卓夫…(25)
静岡県下の幼稚園教育活動の概況……林　成子…(30)
しゃぼん玉をふく46の表情……清水エミ子…(34)
現代のカウンセリングとエミールの教育論との比較
　遊戯療法を中心に……並河信子…(44)
日本幼児保育史の研究……日本保育学会共同研究小委員会…(52)

現地にみる欧米の幼児教育

荘　司　雅　子

私がこのたび海外に参りました直接の目的は、ノルウェーのオスロで開かれました、「第三回国際大学教育研究会議」に出席するためでございました。日本からは東大の海後宗臣氏と私の二人が学術会議から参加しました。この度の参加国は自由主義国だけでなく、ポーランド、ルーマニア、ハンガリー及びソ連などの共産主義国からも出席し、活発な議論が交されました。

この機会を利用して、会議終了後、私は長年希望していた、ヨーロッパ各国の現地における教育施設を見てまわりました。

日本の羽田から北極を経てからデンマークのコペンハーゲンに向かい、そこに一週間滞在し、次にノルウェーのオスロへ行き、会議に出席したのです。オスロからスエーデンのストックホルム、フィンランドのヘルシンキへと北欧四カ国に最初の一カ月即ち昨年の八月いっぱい滞在しました。それからオランダ、ベルギー、フランスへ行き、次にイギリスへ渡り、十一月下旬、アメリカに向かいました。そして今年の四月末再びヨーロッパにもどり、スイス、オーストリア、ドイツ、イタリア、ギリシア、エジプト、パキスタン、インド、タイ、香港、台湾の各国をまわって、この七月、一年ぶりで帰国しました。

これらの国々でそれぞれの幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校、大学、その他社会教育と全般にわたって教育施設を見て歩きました。今日はその見たまま聞いたままの一端をお話し申し上げようと思います。まず、イギリスやドイツそして北欧の幼児教育をアメリカのそれと比較しながら申し上げたいと思います。

ヨーロッパからアメリカ、そしてまたヨーロッパへとまわってみて、特に感じさせられたことは、幼児教育に及ぼす財政上の問題がいかに大きいかということでありました。幼児教育の歴史はヨーロ

ッパの方がはるかに古いが、しかしそれを今日のような発展へもって来たのはアメリカであるということができます。そして、それは特に財政的裏付けが十分にしてはじめてできたのだということを知らされました。

ヨーロッパで、アメリカに劣らず、国の力で組織的に幼児教育を行なっている国としては、社会保障制度が立派にしかれている国、デンマークとスエーデンです。

「スエーテン」

スエーデンの児童はみな、あるちゃんとした施設に所属しているのです。たとえば——

零才——七才　Health Center で児童の健康は国の保護を受ける。

七才（学令）——十八才　学令期の児童のための School Health Center がある。

七才——四十才　Dental Care（歯の健康）

七才——（学令期）教科書……無償

七才——（学令期）School Meal……無償

ここで感心したのは公立の幼、小、高からすべての公立の教育施設では昼食が無料であることです。もちろんこれは希望によりとらなくてもよいのですが。スエーデンでもう一つ非常に特色ある教育施設として "Play Ground System" があります。一才半——十五才までの児童のための遊園地です。市内の方々にあるのです。交通のはげしい所にも、鉄柵でかこまれてちゃんと遊び場が確保されているのです。内部では、年令順に子どもの遊び場が区別され、しかも専門の遊びの指導者が居て子どもの遊びを指導したり励ましたり、計画したりするのです。指導者には市の方から給料が出て、子どもに理解をもった人があたっています。

幼児教育の施設としては、Day Nursery School と Play School（幼稚園のこと）と放課後の子どものための Afternoon School があります。

Day Nursery School は働く母親の子どもを一日中あずかるためのもので、三カ月——七才までの子どもが入ります。Play School は四才——七才までの子どもが入ります。母親が働いていてもいなくても一日の一定時間だけ保育する幼稚園のようなものであります。

Afternoon School は放課後教育といったもので、子どもが小学校に入っても、母親が働いているために、家に帰ってもひとりぼっちになるので、そういう子どものためにあるものです。その他青少年クラブや年長児童のための Youth Center などがあります。ですから子どもたちは、行くところなくぶらぶらするということがありません。この放課後教室にも、専門家がいて子どもを指導しています。ですから子どもたちには、不良化するような余裕がないわけです。これらの施設はいずれも国や地方自治体が、直営したり、補助金を出したりしています。スエーデンの、ある Day Nursery（一日

保育所）の組織を御紹介申し上げましょう。

生後――一才の子ども六人―One Section

一才――二才の子ども六人―　〃

二才――三才の子ども十二人―　〃

三才――五才の子ども十五人―　〃

五才――七才の子ども十五人―　　計五十四人……定員

職員（児童五十四人につき）――

園長　一人

nrusery school teacher（教師）　二人

nurse（保母）　四人

cook（料理人）　一人

cook-assistant（料理人のお手伝い）一人

家政婦　二人（時間払）

visiting docter（医師）　一人　　計十二人

これだけのスタッフです。どうですか。

児童一人について出される年間費用を尋ねてみました。一人あたり三千四十四クローナ（一クローナは日本の八十円に相当）約二十四万円で、国が六パーセント、地方自治体が七十四パーセント、あとの二十パーセントは親の収入に応じて補なわれます。なお苦しければ免除されます。これにくらべて日本は一日一クローナ（八十円）以下です。

Play School（幼稚園）は四才――七才の子どものためのもので一日約三時間保育します。主としてしつけと訓練で純教育的な施設です。児童数は一グループが、多くて二十人。四十人いたなら午前二十人、午後二十人という方法をとります。教師は一グループに一人で、それに必ず助手が一人つきますから手がとどくわけです。

スエーデンの模範的な保育所を一つ見せていただきましたが、保母のための施設も実によく整備されていました。その施設の訪問者名簿にサインを頼まれました時、日本の議員団の名前が目にとまりました。日本の議員もこうした、模範的施設を見てないわけではなく、ちゃんと見ていることがわかりました。ただ、こういう人たちは日本に帰って、議会に見たことを報告しているかどうかたいへん疑問に思いました。

「テンマーク」

この国はスエーデンとよく似ています。ノルウェーやフィンランドはそれほどではありません。やはり一国の政治経済はその国のすみずみにまで（保育所のすみずみにまで）影響しているものだということ、その国の経済は、その国の歴史や文化に大きく影響されて来ているのだということがこうしたさまざまな国の現状を見て感じられました。スエーデンは実によくととのっていて、しかも経済的に豊かな国です。――それは第一次大戦にも第二次大戦にも中立を守ってきたためです。デンマークはスエーデンほど豊かではありま

せんが、伝統的に社会保障が確立しています。それは妊婦に支給するミルクから埋葬費の補助まで保証されています。託児所、幼稚園および放課後学校などは法律で定められています。これらは地方公共団体が直接に経営するか、補助金を出すかするようになっています。

託児所　生後――三才
幼稚園　四才――七才
経営費の負担　四十パーセント――国　三十パーセント――地方

放課後教室（義務年限内）――経営費の負担　四十五パーセント――国　三十五パーセント――地方

以上のように定められております。コペンハーゲンで私が見たものにこんなのがありました。託児所と幼稚園と放課後教室が、建物は別々ですが同じ構内にあります。託児所の保母は住み込みで二階に住み、その下が子どもたちのへやになっておりました。保母の衣食住は一切無料です。そして初任給は、一年の教育を受けた者が約六百クローネ（約三万円）二年の教育を受け一年間経験のある者で千クローネ（約五万円）だそうですが、それでも安すぎるということでした。保育所の内部は何しろ清潔で静かでまるでホテルのような感じで、子どもの泣き声も叫び声も聞こえません。保母が泊りこみでいるから、日本のように交通ひんぱんな所を通う必要もないので疲れる量がずっと少ない。したがって充分に子どものめんどうが見られるということになります。託児所、幼稚園の職員数は、次のようです。

保母、一人　助手一人――乳児八人

教師、一人　助手一人――幼児二十人

参考までに、幼稚園では文字や算数は計画的には全く教えておりませんでした。ヨーロッパではどこの国でも教えていないようです。

ヨーロッパを通じて感心したことで、日本の学ぶべき点としては「教師養成」の問題があります。ノルウェーで聞いたことです。託児所の先生になるにも幼稚園の先生になるにも、教師養成の大学に入らなければならないのですが、日本と違ってその大学に入るには半年の現場の実習と半年の家庭での実習、合わせて一年の実習経験をしなければならないのです。見習い月間は半額の給料が支給されます。このように充分な経験と豊かな教養をもった専門家だけが幼児教育にあたっているのです。

オスロにある公立幼稚園で職員の働いているようすを見て来ました。郊外にある小高い丘の上の赤い屋根の家でした。そこは二百年前からサナトリウムであったところをゆずり受けて、五年前に幼稚園にした建物です。二棟あり、一方は保育所、他方は幼稚園です。Nursery School は朝七時半――夕五時半まで、働く母親のためにあるもので、母親は、月に五十クローネ（約二千五百円相当）払います。児童四十人に対して教師が二人、助手が一人います。

他の棟は普通の幼稚園で十時半から午後二時までで、一階が三才から五才、四十人、教師が二人、助手一人、二階は五才から六才、二十人、六才から七才、二十人と二クラスになっています。一クラ

スは二十人で教師が一人です。二十才以上にならないと教師にはなれません。教師と子どもたちのようすを見ていると、教師は日本のように何から何までひとりでするのではなく、純粋に教育にあたっている、つまり、子どもたちといっしょに遊びながら、その中で指導しているようでした。環境をととのえる仕事は、見習いの者が全部しておくようになっていました。教師の資格のある者は、最低千クローナ（約五万円相当）が支給されます。それでも、一般的にみて低い方だと、賃上げ運動をしているということでした　一方、教師たちは幼児教育向上のために毎年研究を重ね、その面にも誇りをもって励んでいます。

スエーデンの制度のところで申し上げなかった休日の過ごし方についてちょっとつけ加えますと、夏休みなどには別荘へ行く子が多く、そこへ行くための費用は全部無料です。個人の別荘がない子にはHoliday Campsがあり、勿論そこへ行く交通費も無料です。要するに、休みになれば休みで青少年にはまた行く所があるのです。

「北欧の町づくり」

ヨーロッパで再び感心させられた点、それは町づくりです

日本にいた時は騒音などあまり気になりませんでしたが、向こうはとても静かですので、こんど戻ってみると雑音が耳についてなりません。向こうの町は静かできれいです　家で仕事をして疲れた時、ちょっと外を散歩すると身体が休まります。あまりきれいなので、ごみを捨てるなど、はずかしくてできないほどです。至るところにベンチがあり、道路の両側に花壇があります　また至る所に緑地帯や公園があります。非常に気持がよく、植木鉢で町をきれいにしている所もあります。電信柱にも花をぶらさげ、家の窓にも花を植えて、みんなで町全体をきれいにしています。すでに幼稚園、保育所で訓練されているからです　花をつむ子もいないし、方々に鳩や雀の群がいて、人が行くと向こうの方から飛んで来ます。

ミュンヘンの公園で、こんな光景を見ました。おばさんがハンドバックを開いて、しきりに何か出しています。おばさんはバックから小鳥のえさを出して小鳥たちに与えているのです。パブコーンを小鳥にやっているのです　私は〝なるほど〟と感じました。町づくり、人づくりの秘訣がこんなところにあるのではないでしょうか。

次にフィンランドやオランダなど、世界でも人口密度の高い国々はどうでしょうか、申し上げたいと存じます。

「オランダ」

アムステルダムから三十分程行くとライテンという所があります　友人の案内でライテンの幼稚園と小学校を見ました　環境は子ども自身に自らいろいろと遊ばせるようにしてあります。幼稚園では、やはり文字を教えず、英国式にInfant Schoolとよんでいます。

人口が多いため、一クラス四十人です。クラスの中に、砂場、粘土箱などがとりつけられております。

これは、この国が手先の細かい仕事の訓練を重視しているからです。アメリカと比較して、オランダ、ヘルギー、フランス、ドイツの幼稚園では、大きな道具を使うことより、細かい道具を相当使っているのに気づきました。アメリカは大きな筋肉の訓練を重視し、これらヨーロッパは手先の訓練をも重視しているのです。

「フィンランド」

ヘルシンキでは、世界的に有名な、Children's Castle（子どもの城）を見学いたしました。それはHospital Only for Childrenで、子どものための立派な病院、文字どおり〝子どもの城〟です。戦前から始められ、戦後に完成し、乳児、幼児、児童と別々に分けてあります。そして、中には保育所など幼児に必要な教育環境が用意してあります　この病院では、母親から完全に離して完全看護を行ないます。保母訓練もここで行なわれています。

「イギリス」

英国は五才から義務教育です。五才から七才までがInfant School です。早くからいろいろ教え過ぎるという批判が今でも行なわれています。学校は、すべてカトリック系とプロテスタント系のどちらかに、地区によって決められています。私は、はじめスコットランドのグラスゴーに行き、そこのプロテスタント系の学校を見ましたが、なかなかきびしく、Infant School でも普通の小学校のようにきちんと並ばせていました。私は九月の下旬から十月二十五日まで滞在しましたが、その間に新聞の論説で、五才から一斉教育では早すぎないかという意見が出ておりました。そのように英国でも、最近は種々の議論が出され、大分新らしい方向に向かい出したようでした。

一カ月あまりの滞在中いろいろなタイプの学校を見せてくれましたが、ロントンで紹介されたところは、だいたい新しい行き方をしていました。ある小学校の校長さんは、得意そうに説明してくれました。「英国は早くから能力別にすることが多すぎる。私はそうしない」と。英国では教育内容からカリキュラムの構成まで一切が校長の一存でよいのです。それだけに自分の学校は他と違ってこんなふうだとその特徴を強調して、見せてくれるのです。見ると、そこはマンチェスターやグラスゴーとは大分違って（写真をくれましたが）五才児から読み書き算数を教えるというようなことはせず、アメリカで以前からされているように、なるべく子どものもっている能力を発揮できるような機会を与え、経験を豊かにするという方向に向かっているようでした。だが、英国には厳格な試験制度があり、そのために小さい時から訓練される必要があるので、なかなか新方向にきりかえにくいのです。十一才で試験があり、

① 二十パーセント　Grammar School

② 十パーセント　Technical School

③ 七十パーセント　Modern School

というふうにわけられます。①に入れれば将来大学へスムーズに

入れ、③は平凡人で、卒業すればそのまま家庭や事務職などについてしまう人の学校です（Public School―私立―には普通、教会の特殊な宗派の専門家を育てるから全体の五パーセントぐらいが入る程度です）。ただ十六才の時にもう一度①や②の高等教育を受けるための機会（試験）が与えられます。しかし、いったん十一才の時に落ちるとなかなか入れなくなるそうです。

このような試験制度から来るへい害を是正するために、Comprehensive School 総合学校を作ろうという向きが見られるようになりました。ロンドンのある Secondary School の校長さんは、言っておりました。「学校を大きくして、校長も共通にし、そこに Grammar School も Technical School も いっしょに一つの学校の中におけば、子どもたちにも移行の機会が多くなると。

英国でも、今までの行き方を是正し、単にかたよった専門家だけを育てるのではなくて、もっと幅のある、広い教養をつんだ人を早くから育てようとしはじめているようすでした。

五才以下の、ある公立の Nursery School を見ました。大きな古い丸太やバスの古いものをもらって利用して遊ばせていました。何から何まで子ども自身にさせていました。食事の時を見ましたが、食事を配るのも、みな年長の子どものお当番がちゃんとやっていて教師はじっと見ているだけでした。日本のように、朝から晩まで子どもを休みなしにお話―歌―今度はお絵かき―次は自由遊び、などとひきまわさない。必ず休ませる時間をとっています。休息の時間があり、ひとりひとりに折りたたみ式ベッドが用意されています。

イギリスでも、最近は子どもをひっきりなしにかりたてることのないよう、よく考えられております。十年前にアメリカで見たのですが既にひとりひとりのベッドがありましたが、さすがに財政豊かな国だからでしょう。

「**トイツ**」

ここではベルリンとブレーメンで幼稚園を見ました。

ベルリンではペスタロッチ・フレーベルハウスを見学いたしました。ここは幼稚園、小学校の先生を養成すると同時に家政婦の訓練もするところです。そして附属の幼稚園があります。即ち、貧困な子や親のない子を社会施設で育てるというペスタロッチの教育精神と、子どもの年令に応じて純教育的に育てねばならないとするフレーベルの精神とを合わせた精神の実現を目指した教育機関であります。

フレーメンの田舎に行きましたら、どの教育施設も一般に規模が小さく、学校もまた家庭的雰囲気をかもし出さなければならないとしています。郊外の公立の幼稚園でも規模が小さく、手先の道具を使わせておりました。ドイツ、スイス、オーストリーなどいずれもアメリカのように大きな道具はあまり見あたりませんでした。

時間もなくなりました。まだお話申し上げたい国がずい分残っておりますが、この辺で終りにいたします。（一九六二・一〇・一〇）

幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか

社会的遊びを主とした問題

黒田成子

最近幼児の保育に当って従来のように成熟を待つ保育よりは積極的に教師の方で適切な時期を捉えて意図的に指導を行なう必要があろとよく言われている。

五才児といっても近頃の子どもは体格も向上し、マス・コミなどの影響で知的発達も従来よりずっと早熟である　功技台の少々むずかしいものの使用も、水道方式をとりいれた故の習得も、小さい代議士のように複雑な話合も、そして新しいアイディアの造形もこなせる現代の子どもである。そうした子どもたちにいまさら砂場とか水遊び、積木などという原始的なものを取りあげる必要があるだろうかという人もあるかもしれないが、わたしは与えられた題目の内容としてこのことについて記してみることにした

今かりに非常に進歩してきたように見えるわが国の幼児教育界の表面的な動きから眼をそらして子どもそのものに焦点を向けてみよう　そうすると砂場とか積木などは子どもたちの生活とはきってもきれない主要な部分になっていることにいまさらのように気がつくのである　幼稚園の園庭になくてはならない環境の一部として砂場がある　それは滑り台やふらんこが必要であると同じようなものとしてどんな貧しい園にもそなわっている設備である　しかもつかいようによっては随分いきいきした遊びや効果を出すことのできる設備であるのに、それが案外つかわれていない現状ではないだろうか。

事実幼稚園や保育園をいくつかまわってみると、砂場や積木遊び

は計画された保育以外の、いわば山と山にはさまれたせまい谷間のような位置しか占めていない　朝の集まり以前に皆がそろうまでとか、製作のすんだあと、リズムの始まるまでのちょっとした時間、あるいは昼食後のひとやすみとか、息ぬかしといった程度で行なっているものが多い。教師はシャングル・ジムや他の施設を利用させると同じ気持で園庭全部を見渡し、怪我のないようにと注意している　そして砂場に子どもがいれば「あ、砂いじっているから大丈夫」と思っているだろうか

子どもの方は楽しそうに砂遊びをしていても、いつ自分たちがやめなければならないかをよく心得ている　一人の子どもが勢いよく砂を飛ばしながら穴を掘っている。すると他の子どもが「だめだよ、そんな事したらくずれちゃうよ」と言う。「だって今のうちだよ」「あっ、そうか、今のうちだね」と相手はうなづく　「今のうちだ、今のうちだ」と口ずさみながら子どもは掘りつづける　まもなく先生が「お片づけ」と呼びに来ると子どもたちは砂場の道具をかきあつめ、一斉にホールの方へ駈けて行く。子どもは自由を与えられていたら、ようやくできはじめた汽車の線路やトンネルをこわすどころか、丹念に創りつづけていったであろうにと思うとまことに惜しい気がした。

朝の大切な時間に勉強もしないで砂いじりばかりさせていてはわざわざ幼稚園に出しているかいがないと教育熱心な父兄たちが言うだろう。しかし、教育というものは一見たくさんの経験をもった教師が未経験の子どもの手引きをしながら、知識を子どものレヴェルにふさわしくかみくだいて与えるものであるように考えられやすいが、ほんとうはそのような簡単なものでないことはわたしたちもよく承知している。生きた教育とはかりに教師が助言者としてそこにいたとしても子どもが自分で「あ、これだナ」と感じとっていくものでなければならないと思う。

ことに「社会」の領域では「誰とでも仲良くするのですよ」といくら教えても、そして子どもがたとえ立派な答ができたとしても、実際にこれを実感として感じ、経験として身につけていくのでなければほんものとはならない。

水遊び

次に水遊びの例をとりあげて子どもの姿をみることにしたい。

＜例＞

七月×日　午前十時―十時五十五分

一年保育児が組全体で園庭に出てお洗濯をしている。組の中でも体力があるのに気が弱く、いつも人にやりこめられているKと、行動は鈍いが口の達者なRの二人の男児と、いるかいないかわからないほど静かなE子とが砂場で道具をつかって遊んでいる。三人は他のグループのつかっているタライのあくのを待っている。

やがてタライがあくと三人はバケツで水を汲みハンカチの洗濯

を始めた　Rは石けんをつけてハンカチをもむ。
K「石けんかしてくれよ」
R「そこにあるじゃないか」とKの頭をたたく。Kが石けんをつかうと次にRはこれをとりあげ「きれいに」と「おかたづけ」の歌の一節を口ずさむ。
E子「かして」
R「いまつかっているところだ（Kに）バカ、いまアルコフールが完たよ」
K「ほくアルコフルたよ」
R「するいそ、ずるいそ」
R（石けんをKになすりつける。KがRをたたく。Rは知らないふりをしていそいでハンカチで石けんを包む）
K「つつんじゃいけない」
E子「Kちゃんだってつつんたわ」
K「まちがえたんだ」
KとR言い合う　そのときT先生がまわってくるとRは一段と声を高くして
R「ためなの、自分はかりつかっちゃいけないの」と強く言い、Kはふくれる。
R「このアワ誰かにあげる」（気持よさそうに洗う。）三人は石けんをつけてはハンカチをこする。そのうちハンカチが水中で互にまきれてしまってKとRはとりあいになるが、すぐまた所有がわかる。
E子「アタシは名前かかいてあるからいいの、カワシマ、エミコ」
E子（自分のハンカチの模様を見て）おとなになるまで洗ったらこれみんな落とせる？」
R「おとなになるまで？　へー、かまんか大へんたよ」
E子「かまんしたら死んじゃう」
……
K「もうこんなになっちゃった」
E子「あたしも、こんなにきれい　ママママになっちゃった（模様をみせる）しほってこうやるの、お母さんやっているもん（水の中でしほってみせる）きれいでしょ」
先生「ああきれいね」
　E子はシャングルの一番上までよじのほり、体を支えるとシャンクルから手を放し、ハンカチをハッハッとたたいて、ていねいにひろけて干すところは母親の様子をいつも見ていることが想像される。
　やっとKもRも洗い終る。干すとき
R「このハンカチもっていて」とKに言い、
K「うん」と答えて二人は仲よくやっている。三人はハケツでつ

かった水を汲み出しては捨てに行く、水が少なくなるとタライをかかえたがうまくバランスがとれないでヨタヨタする

はじめRはKのすぐ右隣にいたが先生に

「Rちゃん、どっちへ寄ったらいいの」といわれ、

「あ、そうか」といって右の方に間隔をちょっとおいて手をもちなおした。

タライはやっと三人で運べた

この例はまだ交友関係がスムースにいっていない子どもたちのありのままのやりとりである　RとKはたびたび喧嘩しそうになるが気持の良い水いじりの感触と第三者のE子という存在が媒介となって二人の関係はどうやら同じ方向へと保たれている　三人のうちでRがもっとも身勝手だが友たちからせめられてもうまく言い逃がれたり、先生の前では良い子らしくよそおったりする　KはRに言いまかされるとすぐ暴力をつかい適当なコトバが出てこない　しかしKはRがハンカチで石けんを包んだことをせめるとかえってE子から「Kちゃんだってつつんだわ」といわれた　これに対して「まちがえたんだ」と言えたことはKにしては進歩だ。E子は父親のない家庭で母親と静かな二人暮しをしていろ。石けんをRやKが独占していてもなかなか「かして」と言えない。やっと言ったがRに断られると黙ってしまう　正しい主張ができるように仕向ける必要があろ　この日の「おせんたく」という作業はこの子どもたちにそれぞれの人間関係や社会性を伸ばしていくのによい場となった

ふつう水遊びは内気の子どもには自我をもりたて、自信をつけ、また感情のたかぶった子どもには穏やかさを与えるためによいと言われていろ　砂もこれに似たような効果がある　晴れた日にさわやかな外気の中でいじる砂の感触は指に心地よく、気分をのびのびとさせるものがある　しっとりとした砂はいじられるがまま、形つくられるがままにそこにある　問題をもった子どもでも抵抗を感じないでらくな気持で遊べるわけである　年令が進むにつれて、せまい砂場ではぶつかりあいも出てきて対人関係のうえで多くの問題が提起される

砂場遊び

次に年長児が長時間にわたって砂場で社会的な遊びをした例を記してみよう

〈例〉

・年保育児の組　第三学期のある日　六才に近い男児たち数名が遊んでいる

港へ見学に行った経験に刺激されたらしく、砂場ではさかんに港やドック、事務所、切符売場、運河などがつくられている　はじめ船（古びた木製の玩具）がうぱい合いであったがようやく遊びが軌道にのったようだ

「発送係、発送係、ひき船を送って下さい」
「ひき船、おい、ひき船出せ」
「もしもし、いま出しました」
「おーいどけどけ（ひき船のつもりらしい小型の積木を押し進める）」
「つなをおろせ、Tちゃんなわ」
「早く、あと五分で出発、大阪行」
「バカ、貨物船たよ、キューハーへいくんだよ」

あまり遊びがおもしろそうなので、そばのシャングル・シムを根じろにしておうちごっこをしていた女児たちが砂場の船員たちにこまかい積木と切り紙をませたおべんとうをつくって配達しはじめ、うちは食堂屋に模様かえをして遊びが発展していった。

積木遊び

積木遊びもまた子どもにゆったりした気分を与え社会性の発達を促す遊びである　また創意や想像力を養い安全な冒険を与えることもあげられる　ある五才児組を受け持っている先生が四月から十二月までの記録中積木遊びで発展的であったと思われるいくつかの遊びをひろってみた

お家ごっこ、飛行機あそび、お池作り、遊覧船ごっこ、自動車ごっこ（砂場で自動車道路と車庫ができる。積木の自動車同士で電波連絡をとる）宇宙ごっこ、お家ごっこ（ジャングルの所へ積木をもってきてアパーをつくり、そばに遊園地までつくる）、プールごっこ（積木で飛ひ込み台をつくり、切符整理係もつくる）、汽車ごっこ（ストーフの近くに積木で暖房車、寝台車、食堂車などを作る）。

四月頃のクルーフはせいぜい五、六名であり、持続持間が二十分位であったが十一月頃には十二、三名、ときには二十名位で遊び、時間も一時間以上、一時間半位つづいている　中には「先生お片付けにしちゃ絶対困るわ、今一番忙しいところなの」とわざわざ先生に言いに来る子どももある　子どもは先生がせっかく計画したフランにのってこなくて、かえって子どものたわいない遊びがどんどん発展していつまでも遊ばれることもある　そうしたとき教師はちょっと、爪はじきをされた感じがするものた。しかし本当は喜ばしいことである。

こうした遊びがスムースに展開されるときの場面を考えてみると、時間的に、環境的に指導の面でも制約があまりないことがよい条件となっている。もちろん園生活の規律を考えた大まかなワクは忘れないことが大切であるが、わたしたちが従来水遊び、砂遊び、積木遊びなどに対してもっている常識を打破して種々の道具を出しておくことも必要であろう。

たとえば砂場では秤の古くなったものや、実物のゼリー型、ときには木の舟や飛行機、古くなった積木、なわ、あきかんなどをおく、また積木のそばに籠をおき、この中にお父さんの古いカハンや

お母さんの不要になった衣類やハンドバッグをいれておくなど遊び道具については固定的に考えないで、いろいろのものをつかってみることも遊びを発展させる一つの原因ともなる。

水の使用も秩序の保たれる範囲内でゆるやかにしておくことである。「先生水いれてもいい？」と子どもがきくと教師は申しわけのようにチョロチョロと水をふりまいてさあ遊びなさいという。身体的にいってこまかい筋肉の発達がまだ充分でない子どもたちはダムの両岸やトンネルの山などをキッチリさせるため砂に充分な湿度がなければできない。遊びに相手の複雑性を望むなら水の使用ぐらい当然の事であろう。

五才児の終りまでには社会的な遊びが随分さかんになり、対人関係も複雑になってくる。その能力を増していく面が頭や口先だけに走ってしまわないように、知的社会的成長を受けとめるゆたかな素地をつくるために、自然の場での遊びをもっと取りあげたいと考えている。それが、五才児の生活にはわたしたちが日頃考えているよりもっと必要な面ではないかと考え直している昨今である。

（東洋英和短期大学）

五才児の砂遊びの記録

丸太で線路をつくる

すみお、ゆきよし、しんや、みちのぶ、砂場で丸太を滑らせているうちに、線路を作りはじめる。ひろことあいこがこれを見て、「トンネル作ろうよ。」と二人で作りはじめる。

誰と誰はこのトンネルへ入れてあげるなどという。しげあきとてつおはあいているところに丸太を滑らせながらお互に会うと「オス」と挨拶を交している。すみおとゆきよし、みちのぶとしんや、車庫を作りはじめる。山のてっぺんが車庫で、入口の坂から線路に通じて、あいこたちのトンネルへと念入りにこしらえている。線路は丸太を滑らせて型を作り作り、仕上げて行く。しんやはすみおの方へ路をつけたいらしいが、うまくいかない。すみおの作った路を少しこわして自分の路とつなげようとしているところを見つかってしまう。

「第一ずるいよ。大きくなったら泥棒になるよ。」

とすみおが力んでいう。ゆきよしもみちのぶも同感のようす。ゆきよし、てつおにもつげている。しんやは何とも言わず、車庫の方へまわり、みちのぶといっしょに橋をこしらえる。ゆきよしの方は山のすぐ下を掘りさげて行くので、そこはちょうど崖のようになっ

ている。

「この崖、すごいだろう。」

と誰にともなく言っている。トンネルはできたがすぐこわれたので鉄橋になる。大体の路ができると、それぞれ電車（丸太）を走らせてみる。

川をつくって水を流し橋をかける

あきはる、ひろふみ、しんや、よう、しんいちろう、しげあき、水を流しては川のように細長い水たまりをつくっている。どろんこになりながらおまもりの話をしている。

しんや「おまもり、グローブの形している。」

よう「僕、あきはるちゃんの組でいいよ。」

しんや「僕、あきはるちやんの組でいいよ。」

よう「しんやちゃんは僕の組だものね。」

しんや「僕、なっていい。」

しんいちろう「僕、一回しかなったことないな、つまんないな。」

「僕、あきはるちゃんの組になっていい？」

あきはる「うん。」

しげあきが穴を掘る。トンネルのようにして川を流す。しげあきは黙っている。みんな川のまわりに集ってまわりをかためている。スーパーマン、ロボットの話をする。

「てっちゃんのくだ、ながいのなあ。」

「眼が見えないの。」

あきはる「めくらね。」

しんや「そんで、かおが乞食みたいのなあ。」

と話し合うが、手は砂場の砂をいじっている。あきはるが水を流すと、トンネル（砂で造ってある）がくずれる。ようは水に浮いたありを見て、

「あっありんこが流れちゃう。」「かわいそうだね。」

そしてありをひろおうとする。その水の流れのところに電車（丸太）を通す。すると砂がくずれてくちゃくちゃになってしまうので、あきはるが、

「やめ、電車やめ」

という。みんな川の中で電車をひっぱりまわすのをやめる。

こんどは電車にしていた丸太を橋にする。川は三方に分かれていて、その中心は三角州になっている。それに橋がかかっているわけであるが、その形はすぐに変化する。こんどは、しげあきが水をくみに行く。しげあきは砂でトンネルを造っていて、その下に水をくぐらせるようとしている。そこへてつおが来る。砂場あそびの子どもたちに向かって、

「けむしどこにいるか。」という。

あきはる、しんいちろう、よう「うるさい。」と口々に言う。

「いいですよ。」とてつお。そのうちに、ルミがてつおをひっぱりに来て、てつおは行ってしまう。

ひろふみはやがてひとりで水をバケツにくみ、少しはなれたところでひしゃくとバケツで遊びだす。しんやが水をくんでくる。他の子どもは思い思いに砂を掘っている。しんやが来ると、ここからここから、というが、しんやは自分の思う通りに流す。残りの少しの水をようの方に流す。みんなドロドロの砂をこねまわし、だんだんに砂の山を大きくしている。川幅も広くなる。そこに、橋をかける前は一本だったが、こんどは二本丸太をつなげる。最初橋けたのようなものを置いたがそれは不成功。その橋を、手をひろげておっかなびっくりといった足どりで渡る。

「なんだ、僕わたるよ。」と手をひろげて、やっとようが渡る。最後にランラ、ララランランと歌いながら渡る。うたは歌っているが、足の方は他の子たちと同じである。〝足のおっかなびっくり〟をうたでかくしているといった具合。それがすむと、

「さあ修繕をするんだ。」と言って、その橋をとってしまう。丸太を川の真中へ置いてそのまわりを砂でかためたり、せきをつくったり、オダンゴをつくったりしている。

・あきはるたちの方では、一時オダンゴつくりになる。しんやは橋の上にオダンゴを並べたりする。そこへ、こういち、ゆたかがやってくる。かわいた砂を、あきはるたちの掘っている川や、オダンゴの並んでいる橋の方に投げる。ゆきよしも来て砂をかける。

しげあき　「あきはるちゃんに言うぞ。」

「お当番のくせに、砂をいれていい？」と軽く言う。

ゆたか　「こっちに入れようとしたら、あっちにいったんだよ。」

ゆきよしはこういち、ゆたかと遊んでいたが、

「おとうさん、まくって。」と袖をまくってもらって、

「入れて。」という。

「山の組おゆうぎ。」と誰かが言う。それを聞いてゆきよしはすぐ、こわそうとする。

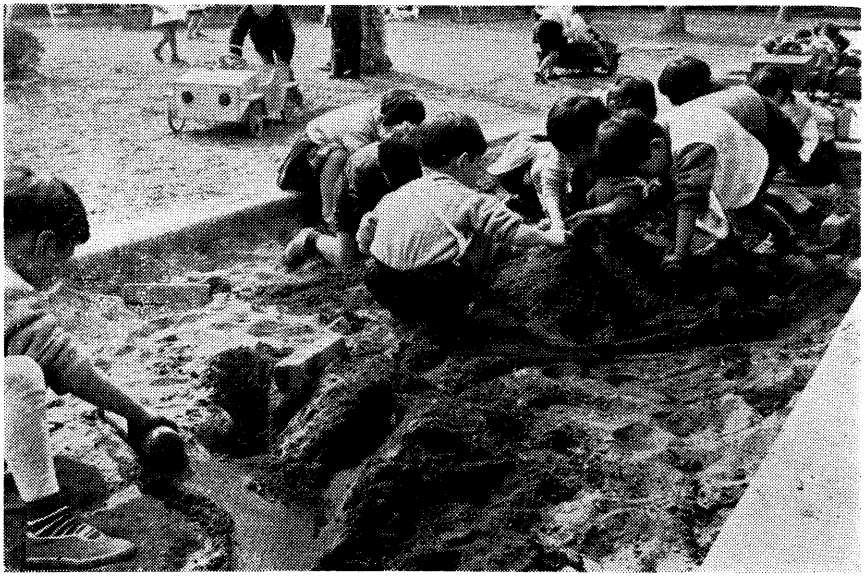
あきはる　「こわさないでくれ。」

ゆきよし　「こわさないよ。こわしたってこわさないよ。」と苦しい返事をする。みんなもこわしたくないらしい。

しかしとうとう、

ゆきよし　「どうしておゆうぎというのに、片づけないの？」

「こわさなければいけないのよ。」



あきはる、よう、しんやは丸太の上を走ってみる　それを見てゆきよしがしようとすると、あきはるが、
「どうしてわたれるかっていうんだい。」
と、丸太の橋を渡るのを拒否する。
ようは「だって、こわすもの。」
とゆきよしにいう。とうとうみんな、そのままにして手洗い部屋にはいる。

丸太とあき缶の電車で遊ぶ

やすお、ゆきよし、しんいちろう、てつおは砂場で電車の線路作り。そのそばで、こういち、ゆたか、たえこ、ひろふみ、ルミが砂ダンゴをつくってあそんでいる。やすおたちは、丸太の電車を動かしている。線路はあらかじめできているのではなく、丸太の電車を動かしているうち線路もできるといった場合の方が多い。ゆきよし、缶詰のあき缶を見つけて、それを丸太の上にかぶせる。
「こんなになっちゃったあ。」それを聞いてしんいちろうが、
「いいじゃないか。」「急行列車がいい。」
と言う。それを聞いたゆきよしは、他の子どもに、
「これ新しいだろう。」と見せに行く。ゆきよし、その電車（？）を走らせる。
ゆきよし「おい、おいらの電車故障しちゃった。」
「それ、助けに来るのね。」
やすお「これ、助けに来る電車ね。」とたけの短かい丸太の電車のところに走らせて行く。また、砂を少し水でぬらして線路を掘る。
「これ急行　日本に二つしかない。」とてつおが言う。
「ほんとうは、そんなのないけどね。」
としんいちろう。こんな会話しながら、二人とも電車（？）を走らせている。しんいちろうは電車（丸太）を、穴を掘るようにつっこみ、その上に少し砂をかけて押しつけて、それからその丸太をひき出す。すると丸太のかっこうに穴があく。それを車庫と名づける。また、長さの短い丸太で鉄橋もつくる。ゆきよしは、
「おっこっちゃった、助けてくれ。」
みぞのようなところに電車をつっこませて叫ぶ。

幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか

幼稚園卒業期の子どもの劇あそび

村石京子

桃の節句が近づき柔かな春の陽ざしも感じられる頃になると、年長組の子どもの生活は、幼稚園の卒業そして小学校への入学という一大画期が目前にきているので、どことなく気ぜわしい毎日となってくる。子どもたちは三学期もなかばを過ぎると一日一日と過ぎていくその日々を惜しむかの如く、そして幼年期のあそびの総仕上げであるかのように、すっかり勝手を知りつくした園の中を縦横無尽にかけめぐって遊びにひたり、全身で卒業の喜びを待ちうけている反面、心のどこかにはやはり二年なり三年なりの毎日通った幼稚園をもう巣立っていく時期が来たことへの深い哀愁、これは多分、教師や親の気持を敏感に感じとることからきているのであろうが、そんな気持ももっているようにもみられたりする。教師の側は、アルバムの整理などにいそがしく追われながら、入園当初の幼なかった写真をみてはその当時手がかかって困ったことを思い出し、その一人ひとりがこんなに明るく立派に成長してくれた現在がうれしかったり、手ばなすのがおしかったりという複雑な気持におそわれる頃である。

この時期には、私どもの園では毎年の恒例になっているが、卒業の二組の子どもたちは三月三日のひな祭りの集りを主催するという子どもたちにとっては大へん大きな事業ととりくむのである。このときは、プログラム書きから司会、そして内容はうた・劇・人形芝

居・紙芝居・楽隊ごっこ・その他と種々な出し物を考えて自分たちで会をもち、お母さまたちや小さい組の人たちを招待して楽しい一日を過ごすのである。今回、卒業期の子どもの劇あそびという題をいただいているが、ちょうど時期からいってこのひな祭りの催しのときに入れられる劇あそびがそれに当てはまるかと思われるが、そのことに入る以前に順序として、卒業期になるまでの子どもたちの劇あそびの経験というものが、日常の保育の中にどのような形でとり入れられてきたかについて述べてみたいと思う。

「劇あそび」というものは、常日頃子どもたちの自由あそびの中にかなり大きな比重で入っている場合が多い。それから一方には、教師の意図から進められた劇あそびもある。前の例は、子ども同志の交友関係が緊密になりグループあそびの発展する時期、そして、「劇」というものの概念が、今までに人のするのを見たり、または実際にやったりという経験によってできているような時期に多くみられる。例えば、七匹の小羊とおおかみ・白雪姫・シンデレラ・三匹の小ぶた・赤ずきんのようなどの子どももストーリーを知っているような題材を自分たちで選択して、役割をきめたり観客も数名誘ってきて結構おもしろくそれらしく劇をしていることもあるし、ある場合には幼稚園ごっこ・白鳥ごっこなどと題をつけて、観客はあってもなくてもよし、場所も自由自在、話の運びもその時その時の出たとこ勝負のあそび、私たちはこれをごっこあそびとみなしているけれど、これも子どもたちにとっては劇あそびの一種である。男の子たちが隊長をきめて庭中を歩きまわるアフリカ探検ごっこでさえも、彼らに言わせれば「これ劇やってるんだよ」という解釈なのである

また、教師の側からでた劇あそびとしては、音楽リズムのときに教師が一連のつながりをもった曲をひき、その情景をことばで補充したりしながらよくするリズムあそびも初歩的な劇あそびであり、この際もしお面などをつければ子どもたちは一そう劇あそびをしたのだという気持を強くもつであろう。秋のお山のあそび・遠足ごっこ・動物村のあそび・サンタクロースのあそびなどはリズムあそびとして脚色していきやすい題材であろう。それから、教師が童話をきかせる・紙芝居をする・音楽劇のレコードをきかせるなどして、それをもとにして進めていく劇あそびも保育の計画の中によくとり入れられている。いずれの場合にも、配役はなりたい役をかわりあってやるし、何人でもやれるという特性をもっているし、お面や小道具は簡単なものをつくる場合もあるし、なしですます場合もある。せりふは音楽が中心になるからあえて入れなくてもよいし、話をしたい場合にはことばを入れるといった程度のものである。

いろいろ日常幼稚園で扱われている劇あそびについて書いてきた

が、いずれも要約してみれば「即興劇」または偶然劇とよんでもよいようなもので、やって楽しむことが主体となった劇あそびなのである。こうやって行なっている劇あそびは見せるためにするのでなく、幼児の自己中心性をよい意味で、活用したあそびなのであるから、自分たちは楽しくあそび興じ「劇」をしたつもりでいても、筋というものを考えればどうみても順序よく手際よく運ばれたものではないに違いない。しかし、幼稚園の劇というものはあくまでもやることを楽しむ段階におくのが本体であるから、これはこれでよいのであり、子どもにとって大切な必要な経過であると思う。

さて、こうやって生活の間に劇あそびは深く浸透しているのであって、三月のこの卒業期を前にした子どもたちはすでに劇あそびに関するレディネスができているといおうか、劇あそびをやろうというその意識ができ上っている段階に到達していると考えられるのである。とは言っても、級の中の全ての子どもにこれが当てはまるというのは言いすぎであろう。それは活発な子どもたち、発展的あそびの巧みな子どもたちに多くみられるのであって級の中にはまだその段階にいたっていない子どももいるであろうことも考慮に入れねばならないのであって、その子どもたちにも無理なく楽しく今回の劇あそびができるように進めていくということを、この際も教師としては忘れてはならないと思う。

こうしてやりたい意慾の盛んな子どもたちにもそれを存分にやらせ、またそれ以前の状態の子どもたちも楽しくできるようには、どうやって劇あそびを進めていったらよいであろうか。そして更に、今回のそれは今までの劇あそびのように級の中で代りあってやって楽しむということを中心としたものとは少しかわって、もう一つ、見る人たちも楽しくということも考えに入れなくてはならない。自分たちはやっていて心ゆくまで楽しく過ごせたとしても、見る側にとって何やらさっぱりわからなかったりおもしろくなかったりするならば、せっかく会を催してお客さまをよんで一日を過ごすということの意味がうすれてしまうのではないだろうか。やって楽しく、小さい人たちもみてよくわかりおもしろくという面からは、わかりやすく単純なもので、明るく楽しいものであることが条件となってくるであろう。

☆——☆——☆

こうしたことをいろいろ考え合わせた結果、その話の起伏の複雑さの頃合は、年長児の劇あそびにむくのではなかろうかということと、童話自体の有名度からは年少の子どももストーリーを知っているということで「金のがちょう」という童話を選び脚色してみた。

この童話はスライドにもあって園全体の集りの誕生会のときなどに映写すると、特に喜ばれるものの一つであったが、さて劇あそびとしてうまく運べるかどうかはまた別である。ともかくもやってみることにした。くりかえすようになるけれど、幼稚園の劇であるからやはり全体の進行は、音楽が中心になることはこの場合もあてはまる。そこでまず第一に、曲の選択は教師の役割であるからこれにとりかかることに専心した。それから劇をわかりやすくすることと、発表力を伸ばす機会としていくことなどからせりふもある程度入れることにした。せりふの方はこちらに大体の下案はもっていたが、それを最初から出さないで子どもたちに考えてもらうようにした。話の筋を追ってみなで考えていくうち、似たような場面のくり返し、例えば三人の兄弟が順番に森へ出かけるときにお母さんとかわすことばは、弟は前のお兄さんと同じことを言うのがよいという意見が出て、やる方はおぼえやすいし、見る方もわかりやすいということからとりあげられると、宿屋の姉妹が金のがちょうの羽をほしがるところも妹はお姉さんと同じことばでよいという話し合いになったりした。

配役は、やりたい役を代りあってやるといういつもの方法から入った後、一応役をきめて落ちつける段階になると教師はまたも頭をなやますのであった。というのは、無理がなくてうまくいくという点を考えれば、適材適所というやり方で教師がその子どもにあった役を配分することになるであろうが、しかしこのやり方はある意味ではせっかく、自分たちで劇をしようという気持が芽生えているのに、それを伸ばすことをせずに教師から与えられるものを待つ保育へと逆流する傾向がある。それなら子どもにやりたい役をやらせればどうだろう。この場合はやりたい役を自分で選択しそれが当ったものはそれで満足するであろうが全体のバランス、そして他の催しものとふりあいという面では、うまくいかない場合もある。あるいは、級の中の子ども同志のすいせんという方法もあるが、これは一見民主的なようであるけれど、級の中の人望の高い子どもによい役が集中してしまうようなことにもなりかねない。そして劇あそびはどこまでもあそびとしてとり扱われる反面、そのもっている内容として言語指導の大切な意義をもつものであるから、やはりこの機会もその面をしっかり指導していきたいと思うし、普段は引っこみ思案な傾向をもつ子どもが大勢の前でよく発表してそれによって自分自身も、自信をえていくようなきっかけになることも考えられるので、あながち子どもにばかり役を選択させることのみが最上とは言いきれないであろう。友だちの前で、発表することによって子どもは、自分が大勢の子ども、友だちにどのように見られているか、どのように評価されているかという自我意識が高められるし、またい

つもはおとなしいと思われがちな子どもがはっきりとした語調で話をしたならば、友だち間の評価がそれによって高められるに違いない。あるいはまた、日頃交友関係があまり円滑にいかないで困っているような子どもには、友だちと気持を合わせて楽しくやっていく劇あそびを通して、協調性を高め社会性を伸ばすよい機会になるであろう。このようなことを考え合わせるなら、教師が配役を考慮するということも場合によっては必要となってこよう。

種々なことを思いまどったが、結果的にはいろいろなやり方をみな組み合わせていった。自他すいせんもしたし、ある子どもには教師がすすめてもみたし、やりたい役を鉢合わせしてゆずらぬ場合は

＊

＊

＊

じゃんけんもした。ひょうきんで名をうっていたある男の子には満場一致でこびとの役がさずかったし、お姫さまは志望者が多くて何回戦かのじゃんけんの後やっと落ち着いたものであった。

さて、こうしてやりはじめてみるとせっかく苦心して選んだ曲があまり適切でなくまたもや楽譜めぐりで教師は頭をかかえてしまっても、子どもの側は結構演技者としての意識をもち、てれながらも一生けんめいそのしぐさをしたり、せりふの方は一応考えていても忘れてしまえばそれにこだわらず当意即妙、アトリブをきかせてなかなか愉快な場面がみられた　そして扮装はいつもはあまり衣裳を用いずに過ごしてきたが、今回はお面を用いないので雰囲気を出すために何かと考えあぐねているうちに、ハンスはチロリアンハットをかぶったり、牧師さんは黒のとっくりのセーターに十字架をぶらさげたり、宿屋の娘たちや王妃さまなどはお母さま・お姉さまのスカートをかりたりネッカチーフをかぶったりなどしてありあわせばかりであるけれど、楽しい劇のよそおいも整えられていった

そしていよいよ当日の三月三日、やはり本番となると普段落ちつきはらって自信たっぷりだった者も大勢の観客の前では上ってしまって頭のてっぺんから声を出したりの場面もあったが、それもまた子どもらしいおあいきょうと大笑いになったりしたものである

何事によらず頭の中でねっている時と実際とのずれは、保育計画の際にもしばしば起るが、今回も始めにこちらの腹案としてもっていたものとは多少ことなったこともあるが、これは教師が子どもの意見をとり入れたり、子どもに適したものとしていこうとする際には必要な改訂であると考える　それからこの劇あそびのときは一人で二役をし、せりふも短いけれど一人でいうことが多かったが、これはどこまでも卒業期の子どもを対称とした劇あそびに扱われる形であり、発表の基礎のまだないときや、もっと単純な形の劇あそびの経験もまだもたないときには困難度が強いからあまり好ましいとは考えられない　そして更に、教師と子どもがお互に気心を知りつくした時期には、みなで一生けんめい気持を合わせてすることは、お互いがその努力によって楽しさを得るだけでなく、親しさの度合も一そう強まるものだということを知ったのであった。

（お茶の水女子大学付属幼稚園）

＊　＊

＊　＊　＊　＊

幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか

運動を主とする遊びの問題の面で

岡本卓夫

(一) 子どもというもの

一回、二回大きく振って前方にとびだすぶらんこ遊び、得意満面もろ手をあげてのジム上でのバランス、高い台からとび下りて喜々としている腕白坊や。いたるところ冒険とスリルに富んだ遊びの場面が展開される。いわずもがな、幼稚園児の自由遊びのひとこま。

かかる活動的・活発な運動的遊びこそは、急速に伸びつつある彼ら本来の姿であり、彼らの真の生活なのである。しかるに、このような遊びに対し、多くの教師は、これを不当に干渉したり、あるいは抑圧・禁止するという現状にある。

もちろん、数多くの遊びの中には、抑圧・禁止せねばならないような場面もあるにはあるが、かかる小言をいいたがる教師の多くは彼らの運動的遊びに対する能力について十分知らないのではないであろうか。このような運動的能力やかかる遊びに関連のある他の事がら（知的、社会的、情緒的発達）について知っておりさえすれば、不当な干渉や抑圧・禁止もしないだろうし、場合によっては、むしろ、そのような自然発生的遊びの場面よりもっと教育的な遊びの場面を展開させてやることができるのではないであろうか。

教師たるもの、伸びんとする彼らの芽を摘む前に、このような彼らの運動的遊びについての実態をよくさぐっておく必要があるように思われる。

(二) 運動的遊びの複雑さ

では、運動的遊びの面で、幼稚園の時期にどれくらいのことができ、どれくらいのことが期待されるであろうか。

この問題を解決していくに先だって〝運動的遊びの複雑さ〟ということを十分知っておかねばならないだろう。それによって、期待のし方や期待の度合も異なってくるからである。

先ず第一に、運動的遊びといっても、それにはいろいろの種類があるわけだ。幼稚園教育要領流に分けると、(1)器械遊び (2)リズム遊び (3)その他の遊びというように分けられるであろう。さらにそれらは、それぞれ具体的な種目に分けられるであろうし、それらの中には、むずかしい遊びや比較的やさしい遊びなどいろいろある。このように、遊びの種類やその難易度によって、期待の度合も異なってくるということを知っておらねばならない。

第二に、遊びをする人数、すなわち、ひとり遊びの時とグループ遊びの時とでも、その期待の度合は異なる。さらに、グループ遊びでも、人数の多少、同質あるいは異質という具合に、そのグループの構成のし方によっても異なってくるということも知っておらねはならない。

第三に、彼らの生活背景、すなわち、家庭に遊具をたくさんもっているとか、近所に公園など遊び場があるとか、あるいは大ぜいの兄弟姉妹の中で育ったとかなど、彼らをとりまく生活背景やその中での経験の程度によっても期待の度合は異なるということを知らねばならない。

第四に、幼稚園に遊具が十分備わっているかいないか、あるいは子どもたちが十分活動できるだけの遊び場所があるかないかによっても異なる。

第五に、教師が子どもと一しょに遊ぶか遊ばないか、すなわち、彼らの遊びを指導するかしないか、それも、じょうずにするかへたにするかというような、教師自身の認識や理解、あるいは指導技術といったものによっても、その期待の度合は異なるということを知っておらねばならない。

その他、いろいろのことが考えられると思うが、運動的遊びといっても、このように、種々の条件が伴なってきて、それらの条件の作用のし方によって期待の度合も異なってくるということを十分考えに入れておらねばならないと思う。

だから、運動的遊び全般を考慮に入れてこの問題をひとくちにのべるということは、たいへんむずかしいことである。したがって、あるひとつのまとまった遊びをとらえ、それを中心にして説明していった方が簡単であるし、むしろ、その方が理解もし易いのではないかと思う。

そこで、今回は、ぶらんこやすべり台など、主として固定運動遊具による遊び（器械遊び）を中心にし、それらの遊びに関係あるもので、どんなことが幼稚園の時期に期待されるかというようにのべ

ていってみよう。とはいえ、先にものべたように、種々の条件が伴うので、そこには、なお、大まかな表現のしかたもあるということを心にとどめておいていただかねばならない。

(三) 運動を主とする遊びの問題の面でどれだけのことが期待されるか

そこで、固定運動遊具遊びの場で起る諸要因を、一応、次のように大まかな五つに分けて考えていってみよう。すなわち、

(1) 運動能力
(2) グループの人数・構成
(3) 人間関係
(4) きまり
(5) 遊び時間の長さ

先ず、

(1) 運動能力について

運動的遊びの場であるから、そこには、当然彼らの運動能力の問題が考えられるであろう。では、固定運動遊具遊びにおいて、どの程度のことができ、どれくらいのことが期待されるであろうか。

先ず、筋肉の面であるが、腕の筋力の代表的なものとして懸垂持久力が挙げられるであろう。鉄棒での懸垂持久力テストは、平均一分～一分三〇秒くらいである。中には三分くらいできる子どももいる。しかし、足をかけてゆするとか、あるいは雲梯で渡って遊ぶとかいうように、動かしたり、移動したりするような遊びになると、せいぜい一〇秒～二〇秒くらいしか続かない。また、腹筋力の方では、鉄棒あるいは大鼓橋にぶら下がっていて、両足を腕の間からぬいて回れるようになる子どもが、大体三〇～五〇パーセントくらいになる。

敏捷性（スピードを含む）の面では、滑面四メートル・傾斜三〇度のすべり台を長座すべりですべり下りるのに三・五秒～四・〇秒くらいになるし、一・八メートル四角のシャングル・ジムを一周するのに二五秒～三〇秒くらいに、また、そのひとつの穴をくぐりぬけるに九秒～一四秒くらいに、二・五メートルの高さをよじ登っていくのに八・五秒～一二秒くらいになる。しかして、この上で〝鬼ごっこ〟もできるほどに、すばやく動けるようになる。また、長さ六・四メートルの固定円木上を三～五秒で渡れるようになるし、二メートルのはん登棒も、約五〇パーセントくらいの子どもが七～八秒で登れるようになる。

平衡性の面では、シャングル・ジムや大鼓橋の上で両手をはなして立てれるようになる。また、固定円木の上で、前向きや横向き姿勢で自由に渡り歩くことができるし、この上で〝シャンケン遊び〟もできる。少々さわられてもうまくバランスをとって我慢することができる。男児より女児の方がうまい。ぶらんこ遊びにおいても、九〇パーセントくらいの子どもが、ゆすりながら自由に立ったりしゃがんだりできるようになる。その他、鉄棒に腰かけて両手をはな

せる子どもとか、遊動木をゆすりながらその上を渡っていく子どもとか、あるいは、すべり台を立ったまますべり下りるというような子どももでてくる。

器用さの面では、この時期までに随分いろいろの芸当ができるようになる。ほとんどの子どもが、すべり台でどんな格好をしてでもすべれるようになる。ぶらんこでも、九〇パーセントくらいの子どもが自由自在にゆすれるようになっているし、八〇パーセントくらいの子どもが、ゆすっていて前方にとび出すことができるようになっている。さらに、その〝ふれの角度〟をみても、前後で一〇〇度くらいゆすれるようになっている。鉄棒でも、幼児的種目ではあるが一五種目くらいできるようになっている。例えば、足ぬき前・後回り（約五〇パーセント）とか、腹かけ懸垂（約七五パーセント）あるいは、ごくわずかではあるが、さか上がりとか足かけ回転などもできる子どもがでてくる。また、ジャングル・ジムや太鼓橋、あるいははん登棒でのくぐったり、渡ったり、あるいは登ったりなどする競争ができるほどに、手足の協応動作も発達してくる。

以上、運動能力の記述としては、やや大ざっぱなものではあるが、おおよその見当はついたことであろう。なお、かかる能力も、スピードと力を必要とするような遊びでは男児の方が、平衡性や器用さを必要とするような遊びでは女児の方がそれぞれすぐれているということ、また、教師がそばで声援すると、その結果が多少良くなるということをもつけ加えておいてよかろう。

(2) グループの人数・構成について

次に、運動的遊びにおいて、どれくらいの人数で遊ぶことができるかというに、放任しておけば、先ずこの期の子どもでは普通五、六人までのグループでしか遊べないであろう。それも、比較的気持の合った子ども同志の時に限られるであろう。しかし同質グループあるいは異質グループというように、グループの構成メンバーによって、その人数が多少変動することはいなめない。

だが、かかる彼らのグループも、教師が入って一しょに遊ぶということになると、八人～一〇人くらいのグループで遊べるようになり、かかる指導を続けていると、一四、五人のグループででも遊べるようになる。

(3) 人間関係について

では、次にこれらグループ成員間の人間関係はどうであろうか。

一般に、リーダーになる子どもは、活動的・活発でボス的存在の子どもの場合に多いが、彼らの自由遊びでは、それはまだ話し合いで決定するまではできないで、そこら辺に集まったグループの中のかような子どもがそのグループをリードするといった按配である。そして、他の子どもたちは、それに対して何もいわないでフォロアーとなり遊びにはいっていくものである。しかし、一たん遊びがはじまると、ほとんど相互交渉らしきものはみられないで、多くの場合、連合遊びになってしまうものである。

ところが、このようなグループでも、教師がはいって助言したり

暗示を与えたりすると仲よく遊べるし、五、六人のグループなら、こうした助言や暗示によって話し合ったり、譲り合ったりして遊びが進められるようになる。しかして、このような指導を続けておれば、彼らだけの自由遊びでも、こうした場面が、みられるようになる。しかし、人数が多くなって一〇人以上にもなると、教師がいてもこのような話し合いの場はほとんどつくれない。こんな時は、対教師との関係において遊びが進められていくたけである。

このように、幼稚園期の運動的遊びの場における人間関係は、対教師という、いわゆる縦の関係だけでなく、対仲間という横の関係もみられるようになり、指導のし方によっては数人のグループで自主的に遊べるようになるものである。

(4) きまりについて

それでは、きまりの面では、どうであろうか。後らの自由遊びでは、今のべたようなリーダーが先に立って遊びをはじめ、そのリーダーの行動様式がその遊びのきまりになっていく場合が多い。例えば、ぶらんこ遊びなどでは、リーダーが何回かゆすって下りると、次に元気な子どもが乗る、という具合に順番に乗っていき、これが〝乗る順番〟の〝きまり〟になっていく場合がある。まれに民主的リーダーがいて〝一〇回ずつで交代よ〟というように決めることもあるにはあるが、多くの場合、彼らだけの自由遊びでは、はじめからきまりといったようなものはつくって遊ばない。

しかし、これも教師が指導を加えると、一、二のきまりなら守れるようになるし、さらにうまく指導すると、五、六人のグループなら、彼らだけの話し合いにより一、二のきまりをつくって遊べるようになる　しかして、そのような指導を続けておれば、それくらいのグループてなら、教師がいなくても、きまりをつくって遊べるようになるものである。

(5) 遊び時間の長さについて

では、このようにして遊びが展開された時、いったい、何分くらい遊べるものであろうか　積木遊びや砂遊びのような構成遊びの場合で二〇分も三〇分も遊ぶというのはめずらしくはない。しかし、運動的遊びではそうはいかない。ひとり遊びで、しかも彼らの好きなぶらんこ遊びやすべり台遊びを自由にやらせた場合でも、五分〜九分くらいである　たから、彼らだけの自由なグループで遊ぶということになると、この期の子どもでは、これよりかはるかに少ない時間になってしまうものである。

しかし、これも教師が一しょになって遊ぶ場合には、ひとつの遊びを一〇分くらいは続けられるようになる。

以上、きわめて大ざっぱではあるが、幼稚園期の子どもの運動的遊びの場で期待できそうな問題についてのべてきた。しかし、これらに関する研究資料も少ないので、ここにのべたものが正しいかどうかはわからない。ただ、目安的な役割としてなら参考になるかも知れない　さらにはっきりしたことは、今後の研究課題であろう。

（徳島大学）

静岡県下の幼稚園教育活動の概況

林　成子

静岡県は麗峰富士山を背景に、お茶やみかんの特産で知られ、また温泉多く、観光にも恵まれています。この静岡県の幼児教育の現状はとのおたずねに、概況を述べることにいたします。

本県には国立一、公立約一八〇、私立一九〇余　計三七〇余の幼稚園と約二三〇ほどの保育所とで六〇〇ほどの幼児施設がありますが、今回は幼稚園の分野にとどめます。

現在、国公立幼稚園協会と私立幼稚園協会と二様の組織でそれぞれ運営していますが、両協会相和し、年一回お正月に両協会の役員懇談会をひらいて語り合い、本県の助成を得て、単位取得や実力養成の講習などには二つの協会が力を合わせて、その目的達成に努力しています。そしてお互いに長を取り短を補って県下幼稚園教育の成果を挙げるようにつとめ、研究会開催の際も、お互いに招き合って教養をより多く積む機会を持つようにし、なお地域性を取り入れて、研修ならびによき運営をする為に、県下を東部、中部、西部の三支部に分け、さらに小地域で研修会、講演会を開催して、各支部の特色を生かしながら研究協議をしたり研究発表をしたりしています。幼稚園という門表はどこも同じであっても、中味は地域により、その幼稚園個々の経営方針により、教育精神の趣くところにしたがって差違あり、特色を持っています。さりながら、幼稚園の重要性が久しきに渡って叫ばれているのにたいし、理解、認識は未だ充分できているとは言えません。幼稚園と保育所の区別など、まだまだわかっていないと言えましょう　したがって時間を長くおけば、熱心だとかよい幼稚園だとか、送り迎えしてくれるから助かるとか、親の都合がよいようにしてくれるところが、よい幼稚園だとか親切な幼稚園と考えている向きもあります。農村などにはこの傾向が見られます。何とかして、幼稚園はどんなところかよく理解されるようにと、幼稚園とPTAとの連絡会を開き、双方から話題を持ちよって協議をしたり、研修をしたり、実演授業もして、理解しあい、協力するような機会をつくって、幼稚園時代は人間の土台つくりで、すべてにおいて極めて大切であることを正しく認識して幼稚園教育を

うけ、また家庭でも育成に意を注ぐよう力をつくしています。

昭和三七年一月三一日をもって新しい設置基準に添うべきでしたが、五カ年延期となったことは誰も知っていることで、よい環境の中で暮らさせて教育効果をあげるためだと充分承知していながら、容易に環境つくりへの実施ができない現状にあります。ことに私立幼稚園においては財源が大きく響いてくるし、昨今のように教職員の待遇問題が声高く叫ばれると、一層経営不振に傾き、幼稚園教育の進展が、はばまれることになります。全県下を見わたしますと、地域により、保育料（私立）は最低六〇〇円最高一七〇〇円という大きなひらきがあって、それが人件費はもちろん施設設備費に影響し、よい教師を得ることには実に苦心しています。園児数や保育料が、その園の内容充実、発展に重大な関係を及ぼし、そして運命を引きまわしていくことになります。したがって望ましくない園児募集への問題が湧いてくるところもあるのです。私立幼稚園のみならず、公立幼稚園でも、なかなか充分に予算がとれていないらしく、やはり相当苦心されているように聞き及んでいますが、安定感をもった、堅固な、理想的な幼稚園の建設をと考えもし、努力をしても、事実上の立場になるといろいろの困難な事情があり、なかなか容易に思うようにいかないものです。資源にたよるばかりでなく、幼稚園教育の向上、発展に次のような事が支障となる問題点であると考えます。

1　古い伝統によるものが今日も流れていること

前にも述べましたが、幼稚園と保育所の区別がよくわからない為に、指導面に、経営面に支障をきたすことが多いのです。保育所では迎えに来て、送って来てくれるし、長い時間預ってくれるが、幼稚園は月謝が高いのに割がわるいなどの声を耳にし、隣接の幼稚園は、それが為に不必要な神経を費やし幼稚園の本性を発揮できないという問題点

幼稚園の中にも、古い形式を保存したり、幼児のなまの作品への手入れをすることの骨折、それが教師の熱心とか努力とかいう考えでいるのではないかと思われることに気付くことがありますが、どこまでも、その作品の生命を尊重して適切な指導をしたいと思うこと。

2　新憲法公布と共に新らしくなった幼稚園をしっかり知ること

学校教育法第七十七条の目的をほんとうによく理解しているかしらと疑問があります。幼稚園という研究があまりできていないから起ることと思います。したがって目標の達成もほど遠いという感かします。

3　よい環境つくりに全力を注ぎたいこと

幼児は環境に影響され支配されるから、よい環境を用意し計画してやって、よい環境の中に暮らさせ、自然に且つ望ましい生活経験をさせることでありたいのですが、公私立を問わず、この目的に添う為には、まだまだ施設、設備の充実を図らなければなりません。ところが誰も知っていても、それが実践し得

なければ、教育効果を生むことが充分できないと心配します。

4　幼稚園教員養成の急務

目下静岡県は幼稚園数においては全国でも優位にあると言われていますが、教職員の資格者の数においては劣位にあるとき、誠に恥ずべきことと大いに教職員の資格取得と実力向上に力を注いでいます　現在の実情では、四五単位取得するには十年もかかります。こんなことでは有資格者をもっての教員組織は到底望まれません　そこで本年より浜松市において私立幼稚園西部支部の発起にて東洋大学より講師出張三年間ないし四年間に単位四五単位取得を実現しました。なおこの他認定講習によって単位取得ならびに実力養成に懸命に力をつくしています。幼稚園環境の大切な条件としての教師の質も力も揃っていくようにと希うのです。

5　教職員の待遇問題

幼児を教育することは心身共に他の教育に比して身をもってするだけに心身共に疲労が多いのです。表面では、幼稚園の先生は御苦労だと言いながらも、その待遇は実に稀薄です。小学校教員の割より低いのです。久しきにわたって叫ばれているのに、近代になっても待遇改善されていません。是非この待遇改善の実施をしたいのです。少なくとも高校卒初任給一〇、〇〇〇円　短大卒一三、〇〇〇円を支給し、在職教員には年額（定期昇給ベースアップをふくめて）三、〇〇〇円程度増俸するようにと話し合いしています。

6　一斉保育、一束保育の型、課業形式から抜けること

新らしい理論や研究は大切ですが、丸のみにしないで充分味わって、落ちついて、目の前に遊んでいるこどもの実際生活のなまの姿をじっくりみつめて、望ましい指導をしていくようにしたいと思います。教師の手数がはぶける為や御都合主義で一斉に取り扱う様式から抜けるようにしたいものです。

7　園児募集と勧誘について

園児の毎日の送り迎えなど反省したいと思います。幼稚園の朝は新鮮な時であって、幼稚園生活の効果を産む重要な時間です　幼児、人ひとりをむかえて指導の手が延びるわけです。保育所とはちがいます。幼稚園は教育の場です。やむを得ない事情から勧誘しなければならないところもあると思いますが、幼稚園の品位や権威を冒さないように正しい手段と方法でするよう、慎ましい態度で望むべきです。

8　無認可幼稚園の善処を要望

今更取り上げて言うこともないと言われるかもしれませんけれども、無認可幼稚園が存在している為に、認可されている幼稚園の経営管理も教育活動にも支障を来たし、重大な使命達成が充分できない事になります。幼稚園の向上発展を期する上に、県としてまた国として、無認可幼稚園の善処を要望します。

9　家庭及び一般社会への理解認識を高めること

幼稚園だけいかに熱心に努力しても、家庭の理解認識が充分でないならば教育効果をあげることを得ないのですが、家庭とのよき連絡、父母の教育に手をつくしていることが稀薄であると思われます。一般社会への正しい理解、認識を求めるには、何と言ってもこどもの直接環境である両親が第一要素であり、また家庭は大切な教育環境で、よい成長発達への原動力を与えるところですから、よい家庭であるように大いに推進する必要を痛切に感じています。

10　交通安全教育へ力を注ぐこと

交通安全に関する知識も指導も声高く広く与えられていますが、幼い時から交通道徳を身につけ、こども自身自分で注意して身を護るように教育し、習慣づけることが肝要と思います。こんなことを考えてみると、幼い時代にこそ身につけたい教育はたくさんありますが、問題点はこの程度にとどめ、次に本校の研修、研究の行なわれている概況を述べてみましょう。

1　国公立幼稚園＝
- 園長研修
- 主任教諭研修
- 実力養成講習

私立幼稚園
- 設置者園長研修
- 主任教諭研修
- 事務講習
- 絵画製作講習
- 音楽リズム講習

国公私立協同して＝
- 認定講習
- 文部省主催指導者講座へ出席者の伝達講習

2　地域における研修と研究発表

3　静岡清水幼稚園連絡会の活動

園長会と教諭の全体研修を隔月に開催し、テーマをきめて、熱心に研究意欲をもやしています。

4　音楽教育と放送教育について研修

- 全国音楽教育研究会＝昭和37年11月22、23、24の三日間
- 全国放送教育研究会＝昭和38年11月の予定

二つの大きな研究会が静岡市に開催されるので、会場地として音楽教育と放送教育について部会を組織し、テーマをもって研究しています。

5　日私幼本部につながる私立幼稚園研究委員会から本県に依頼の研究課題「言語」について研究途上にあります。

近代の世界の動きは実に目まぐるしく、社会も落ちつきのない姿です　周囲をながめ、眼と耳が忙しく、服装、髪かたち、器具類など新しいもの、進歩したもの、珍しいものが流行し、実に追いかけられて、持っているものはずんずん古いものになってしまいます　私たちも過去を反省し、今日のこどもをどう育てたらよいか、生々した新鮮な今日の生活をさせるために近代の情勢に即応し、望ましい生活指導をしていきたいと真剣です。そして幼児教育者として生きる喜びを感謝し、重要な役割を果したいと念願しています。

（桜花幼稚園長）

しゃぼん玉をふく

46の表情

清水エミ子

○藤棚の下でにこにこしてふいているH男
○ブランコに腰掛けて声を出して喜こんでいるK子
○おすべりの近くで足をバタバタして喜こんでいるY夫
○嬉しくてじっとしていられず手あたりしだい近くの子に話して飛び上っているS枝
○鉄棒によりかかって悲しそうな顔で何回もやりなおしている○子
○庭の真ん中で地面を片足でけとばし、顔をしかめてくやしがっているB男
○一人だけでたりず、他の子にしがみついてくやしがっているA男

数えあげていったら46名全員がそれぞれちがった感情の表し方をしていることに気づいたのです。今までででも、この子はこういう表現の仕方をする子だな、この子は内気で感情を表に現さないが、これで結構うれしいのだなぐらい、今までのいろいろの活動で不確かながら解っていたつもりだったのですが、今年度、七月と九月の二回、子どもの要望もあってシャボン玉あそびをやってみて、子どもたち一人ひとりうれしい時と困った時の感情の表現に違いのあることを知らされたのです。そしてその感情が遊びの発展によって変化していき、よろこびの発見と同時に表情も豊かに、素直な表れになっていくことを知らされたのです。

そのいくつかを具体的な活動の展開をおってお知らせしましょう。

I　困った顔が笑顔に変ったM男（Mは我が強く感情表現のあまり

豊かでない子）

・よくばりの気持がこまった表情を作り、それが努力しようという気持ちに変り、よろこびの笑顔ができた

よくばりのM男は長いストローを箱から取り出し、それを石けん水につっ込んで吹くが一向にふくらまない。バチリとストローの先でわれてしまう。悲しい顔が真けんになる。二回三回ストローをよくつっ込んでそっと吹くがやっぱりわれる。すこしなげやりになって、まわりを見まわすと短いストローの子たちが大きいのを二つも三つも作っている。

短かくしよう　「そうだ、ハサミで切ってこようー」と室に入る。

短かいのでやるとよくふくらむ。

第一回にふくらんだ時、「アッハッハ、できるや」と今まで聞いたこともないすんだ声で笑った。そして「もっと短かくしよう」とハサミで切ってきた　すると顔より大きいのができ、そのうえそれが割れずにストローの先にぶらさがった　うれしくて声も出ないようすだった。それを近くにいたお友たちがみつけ、「わー、Mちゃん大きいどうやったの」と聞くと「ストロー短かくしたんだよ」とするとひとりの子がMのストローと較べた。Mの方が2㎝位長かった。まわりにいた子どもたちはみんな考え込んでしまった

ぼくの先っちょななめになってるよ　するとMが自分のストローをながめて「アッわかったや、ぼくの先っちょ　ななめになってるよ、ほら」とみんなにみせた。それからななめに切ることが大流行、よくふくらまないのを見るとM男は「ななめに切ってごらん、大きくなるよ」と教えていた（この頃はみんながシャボン玉のふき方になれて上達してきたことも加えてみんな大きいのができるようになった）。M男がこんなに表情豊かに、そして、多くの子と口をきき交れたのは入園以来はじめてである。

Ⅱ　足で地をけって困っていたB男

（何事にもあきっぽくうつり気の子）

どんな活動でも終りまでやりとげたことのないあきっぽい、落ちつきのないB男が庭のまん中で顔をしかめながらシャボン玉を吹いてはくやしそうに片足で地面をけっている。

私はまたあきたな、と思いながらみていると、小さい玉はたくさんでている　へんだなと私はそっときいてみた。すると、「どうも大きくならないんだよ、くやしいなあー」といって地面をけっている。

そして、くやしまぎれにストローをびんの底に力まかせにおしつけている　何回かやっているうちに一つ、ぽかーっと大きいのができた　「アッ、できたよ、先生」ととびあがってよろこんだ。私がみていた間たけでも二分間もたっていた　この子が二分間集中できたのは最高だなと思っていると、うれしさにとびあがったひょうしにストローと石けん水を少しこぼした　ストローを拾おうとして腰をかがめたB男は私に「先生ストローこんなになってるよ」と言った。

先が割れるとこんなになるよ　みるとストローの先がいくつかに切れていた。くやしまぎれに底にストローをおしつけているうちに、切れて、朝顔のようにひろがっていたのだ。これを発見したB男は先が割れると大きいのができるよ、と数人に教えていた。それから十分間以上B男はシャボン玉をふきながらオスベリに乗ったり、ブランコに乗ったりしていた。

Ⅲ　顔だけでにこにこよろこんでいるA男　藤棚の下で一人みんなからはなれてにこにこしながら吹いているA男が目についた。

（一学期間かかっても友だちができず何をするのもろく、感情など一向に表さない子、他の活動では他の子や教師がみるとすぐやめてしまう内気な子）

私はおっかなびっくり近よってみた（すぐ通りぬけてしまうつもりで）。

ふたついっぺんに出るね　「先生、どうして一ぺんにふたつでるの、ふたつ目は小さいけど、きれいだね、ひとつめは大きいけど白いだけだよ、どうして」私はふいをつかれてとっさにことばがでなかった。今までこんな大きな彼の声はきいたことがない。耳をうたがったぐらいだ。「ほらね」と顔中くしゃくしゃにして笑っていた。

A男はこの後一週間、家にかえると妹とシャボン玉をしていたという事だ。

Ⅳ　近くにいる子にしがみついてよろこんだS枝

（だれにも好かれる明かるい素直な子）

五、六人でかたまってしゃべりながらシャボン玉を吹いていた。

かたまってシャボン玉するとかたにとまるよ　K子が吹いた一つのシャボン玉がよこにいた友だちの肩にくっついた。みんなアッとみつめた。その瞬間、S枝は反対側の友だちにしがみついてよろこび、とびはねて笑っていた。「くっついちゃった。くっついたね、かたまってシャボン玉やったら肩にくっついちゃったね」と大はゃぎ。

この子たちのグループはそれから、そこらにいる友だち、だれかれかまわず、肩にくっつけてあるいていた。くっつけられて仲間に入っていく子、耳のそばでパチンと割れてびっりして笑い出すグループ、肩にくっつけっこが大流行した。その時、「S枝ちゃん、肩にくっつけようとすると二つでて来て、だるまになっちゃうんだ

よ』と一人が困った顔で相談して来た。「ふうん、やってごらん」とだるま作りをみていた

Ⅴ　人のとばすのをみてとびはねてよろこんでいるC子

（何でも人のをみて楽しむ子、自分から積極的に活動しないし表情も豊かでない）

「きれい、きれい」とふくらましている子の前に立ちふさがって喜こんでいたが

一ぺんに五こもでたよ　「アッ、五こもでたよ」「いっぱいでたよー」ととびはねてよろこんでいた。すると吹いていた子が吹きながら目で「いっこ、にこ」と数えるが、数えるのに気をとられるとシャボン玉が思うように出なくなるのでC子に「あんた数える人ね」と言って、数え係と飛ばす係が生まれ、代るがわるにやるようになった。これをみて、そこここで組ができ、数え係が数えていた。

ぎゅっと吹くといっぱいいっぺんにでるよ　そして、「ぎゅっと吹くといっぱいでるぞー」とおすべりの上で男の子の組がどなっていた。それから、しばらくはプーフーと力まかせに吹くことがはやった。

Ⅵ　ブランコに腰掛け、声を出して笑ってよろこぶK子

（友だちのない、いつでも淋しい顔をしている子、友だちのさそいにも自分からさけてしまう子）

アブクブクブク　きいたことのない笑い声がブランコからきこえて来る。みるといつもブスッとしているK子だ。みているとストローを石けん水の瓶につっ込んでブクブクやって、アブクがもり上ってびんからこぼれ、手にくっつくと、声を立てて笑っているのだ。そしてフッフッと息をかけて、上からたんねんにつぶしていき、なくなるとまたブクブクやっていた。しばらくして、隣のブランコに男の子がのって来たがK子のを見てまねていた（毎年のシャボン玉とばしはすぐにこのブクブクがはやったのだが、今年はこの子が一番先であまりやる子がいなかった）。

K子は、隣の男の子がブクブクをやるのを見てこぼれてくると声を立てて笑った。はじめK子に笑われるとびっくりして見ていた男の子もしまいに二人で顔をくっつけてブクブクやり出した。その日一日、二人は座席もいっしょに並んで座り、おべんとうもいっしょにたべていた。

Ⅶ　おすべり台の近くで足をハタハタさせてよろこんでいるY夫

（いつも人のいない所で、いたずらをして困らせ、しかられても顔の表情一つ変えない子）

上にあがらないでくっついた　おすべり台の鉄の棒にきれいなシャボン玉が一つくっついて光っていた

「くっついちゃった、くっついちゃった、われないぞ」と足をハタハタさせてよろこんでいた。私はあのいたずらぼうずの、ブスさんがとびっくりしたし、こんなことの方が簡単によろこびを表現できるのだなあ、とシャボン玉の力の不思議さにちょっとこわささえ感じたのだ。

Y男はおすべり台の下にもぐり、鉄棒にストローを近づけて、そっと吹いていた。鉄棒に当ってこわれると「チェ」と舌打をしてくやしがり、くっつくと足をバタバタさせ「くっついた、またくっついた」と声を立ててよろこんでいる。通りがかった友だち（悪友）に「風があるからわれるんだよ、おへやでやれば」と言われて、二人手をつないでおへやにかけ込んだ。

家ん中だととばないでこわれちゃうね

入口の柱にくっつけていたが、人の出入でうまくいかない。それをみて庭のはしらにつけていた子もあった。室の真ん中でプーと吹くと、上にあがらずに机の上に落ちてくっついた。「アッ、くっついたー」と大よろこび、もう一人の友だちは、とばそうと懸命にストローを上向けて吹くが、プスンとこわれて一つもとばない。

口ん中に石けんが入っちゃった　いっぱいストローに石けんをつけて上向けて吹こうとして口に石けんが入ってにがい顔をした。「口に石けんが入ちゃった。石けんにがい」と口をすすいだ。Y男は椅子に腰掛け、一心に机にシャボン玉をくっつけていた。

机にこぶたんできちゃった　ようりょうの解ってきたY男はストローを近づけて吹き、いくつも机にシャボン玉をくっつけていた。四つ、五つくっつけた時、「机にこぶたんができた」とまた大よろこび。これをみて室にいた五、六名がみんなまねはじめた。

机にストローくっつけて吹くと大きいのができるよ　そのうちの一人が机にストローをはすにくっつけて吹くと、大きくふくらむことを発見した。

その時、ちゃめで何にでもちょっかいをだすHがとび込んで来て、ストローの先で机の上のY男の作った大きなシャボン玉をつっついて割ろうとして、さわったついでに口を近づけてプッと吹いた。

割ろうと思ったらもっと大きくなっちゃった　割れる前に大きくふくらんでパチンと割れた。それを見てY男は「わあーもう一回シャボン玉ができたね」と言って足をバタつかせ、H夫は「割ろうと思ったらもっと大きくなっちゃった」と二人顔をみ合わせて大笑いし、次に机にくっつけたシャボン玉をもう一度そっとストローをくっつけて大きくして割ることをやり出した。そして室に入ってくる子たちに「机にくっつけてまた吹くと大きくなるよ」と教えていた。そのうちに机にくっつける子と、それを大きくふくらます子と、二手にわかれてやることがはやり「はやくくっつけろよ」「まっ

てろよ、いそくとわれちゃうんたよ」と大へんなさわきになり、机の上は石けん水でひしょひしょになって来た

割れると机にまるがかけるね　「アッ、割れると机にまるがかけるぞ」

「どこのが一番大きいか、較べるからね」と大発見のY男は大声でどなった。

机の上でおすもうしたわよ　その時、室の一番おくで二人の女の子が椅子に座ってしずかにシャボン玉をしていた。

「あのね、Yちゃん、二人でいちにのさんでシャボン玉、机にくっつけるといっしょにわれたり、いっこたけ割れたりするよ、おすもうみたいよ　みてみな」とY大にやってみせた。それをみてY男とAは「こっちが大鵬ね」と言い、Y男は「Hちゃん、ぼくらもやろうよ」とやり出した　はじめはただ机の上で、左右から吹いていたが、そのうちY男が「ずるいよ、Hちゃんこっちへ押して吹くんだもの」と争いがおこってきた　そして土俵がかかれ、ストローをつけて吹く位置がきめられ、東と西に分れて、三、四名ずつで勝ち抜きまではじまった。

そして、ストローの先に画用紙のおすもうをつけ「ぼく柏戸ね」「ぼく大鵬と」すもう大会が始まった。

Ⅷ　友だちのやっていることを一人でじっくり確かめてみて、よろこびをかみしめ、にっこりするE男

（理屈屋で人のやることにけちばかりつけて自分で活動しない子）

石けんのヒンとストローを持ってフラフラ庭や室内をかんとくのように歩きまわり、時々思い出したようにふくらましていた。

ふたごができた　室の中ですもうをみていたが、口の中でフッフッ言いながら、隅へ行って、一人で机にくっつけてやっていた　そのうち、すごいかん高い声で「ふたごになっちゃった」と言った室中の子がE男の方をみた。大きなシャボン玉の中に小さなシャボン玉が入っている。一人の男の子が「わー、ふしぎどうやったらできたの」と聞くといつものくせでちょっといはった顔になったが、それはすぐよろこびの顔に変り、にこにこし、今までのかたさはなく、

もう一回石けんつけて机にくっつけて吹くんだよ　「あのね、もっと大きくしようと思ってシャボン玉にね、石けんつけてもう一回吹いたの、そしてね、机にくっつけて吹いたらできたんたよ」とみんなに、子どもらしく説明していた。この姿をみて、あの理屈屋さんもやっぱり五歳の幼児だったんだなと、うれしくてたまらなかった。

中に入らないでくっついちゃう　これを聞いて、三、四名かやっていたがストローを入れようとして、すく割れてしまう子、そっと中に入れようとして早く吹きすぎて外にこぼしてしまう子で、この課題はみんなにいろいろ考えさせ努力させた

シャボン玉ふたりで吹くと引越すよ　いろいろ苦心してふたこを

作ろうとしていた一人が、すこしじれて、隣でやっていた子のシャボン玉をプッと吹いた。すると、その拍子に、大きいシャボン玉は横にヒョイと動いた。E男はこれをみていて、「アッ、シャボン玉がひっこしたよ。」と隣の子の肩をゆすってよろこび、ふたりでシャボン玉をひっこしさせていた。

こっちのひっこしはほんとうのひっこしだよ ひっこしをやっているうちに、一組の二人は向かいあって、いっしょに吹いたら、一人のシャボン玉はとんでしまい、一人のシャボン玉が前にいた子のストローにくっついてわれずにぶるさがっていたのだ。これをみんなまねたが、他には誰もできなかったようだ。

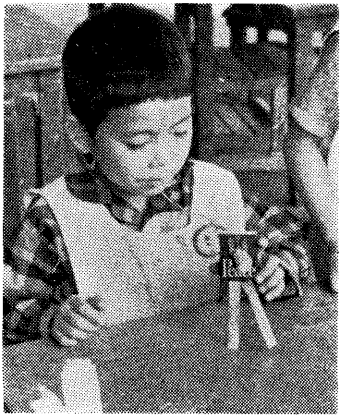
Ⅸ うれしいな。うれしかったな。またやろうね、と一日中よろこんだF男

（ちょっとしたヒントで遊びを考えたり、創意豊かな子）

○ひとりの女の子がビンの中でプクプクしているのをみて、「ぼく夏休み、海にいってかにつかまえた時、かにもプクプクやってたよ。君みたいにだしてた」と言ってしばらくみていたが、

○自分の戸棚からキャラメルの空箱を持って来て、「私にビニールちょうだい、赤いのね」ともらいに来て、机の上でひとりで何やら作り出した。

蟹ができたよ しばらくすると、なかよしの女児を呼びつけて「いちにのさん」で吹いているかわいい蟹ができた。「先生、蟹がシャボンだしてるんだよ」と、とろけそうな顔をしてみせてくれた。



※　※　※

※　※

ひとりでできるかにを作ろう　これをみて、小さい空箱で蟹ができ、ひとりで二本のストローをくわえて、一べんに一つシャボン玉を出していた子もあった。

こんどはたこだよ　F男はひとりでやっている子のをみて、ピースの箱を持ってきて、「こんど、たこを作るよ」とたこを作り出した。「先生、たこの足はいくつだっけ」「八本よ」と言うと「あーそうか」と歌をうたいながら作り出す。ひとり、ふたり机にはだんだん製作者が多くなり、アイテアの交換でいろいろなシャボン玉ができてきた。

X　こんなことをしているうちに、「あたしの箱は蟹作れないからこれでやる」とあきらめから創造したA子

（いつも創意なく、人のまねを上手にしてしまう生活の意欲のない子）

さっそくF男たちのまねをしようと、自分の戸棚に箱をとりに行ったが、あいにく自分の箱はサンスターの細長い箱だ。そこで、しばらく箱を手に淋しそうにしていたが、その箱をストローにして吹いていた。「大きいのできるわよ、口の中がいっぱいでしょ。息がいっぱいいるわよ」と顔をまっかにして吹いていた。私は「すごいわね」と声をかける。

シャボン玉のエレベーター　A子は「これね、先生、シャボン玉がいつまでもなくならないよ。シャボン玉がいったり、きたり、エレベーターみたいでしょー」とうれしそう。みていた子たちもあまり大きいのが出るので「すごいねー」とかん声をあげていた。たこのできあがったF男は、マーフルの箱の底をぬいて、A子といっしょに大きいの作っていた。

XI　ちえっ、ちえっと体全体でくやしがっているZ男は代りのものを考え出した

（なんにでも手が出したくなる子、友だちと同じことがやりたい子）

Z男はF男やA子の大きなシャボン玉をみて、やりたい。しかし、箱がない、近くにいた子に「くれ」というが、誰ももっていない。「ちえっ、やりたいな、でかいの作りたいなー」と体をゆすってくやしがっていたが、昨日作った画用紙の望遠鏡を思い出し持って来て「これでやれるかな」とシャボン玉の中につっ込んだ。「できた、できた。一ぺんに四こもできたぞー」と室中とびまわってよろこんだ。望遠鏡はのびちぢみできるように太いのに細い筒が入っていたので、それにシャボンをつけて吹いたので、一度に二つの大小のシャボン玉ができたのだ。

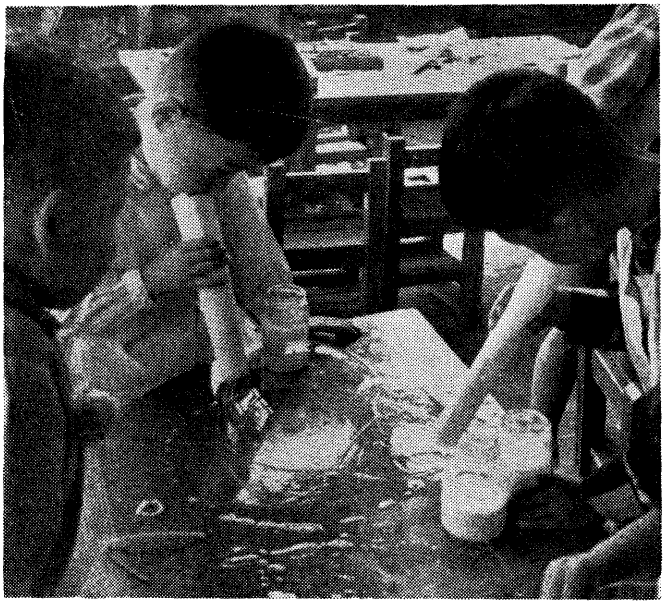
これをみて、男の子も女の子もやり出した。画用紙だけでやるとすぐ、石けん水でびしょびしょになり、切れてしまうので夏の時の舟づくりを思い出したZ男が「クレヨンぬってやってごらん、ぐちゃぐちゃにならないかしれないよ」と教えた。これで机の上には直径25㎝位のシャボン玉がいくつもでき、みな大よろこびだった。

画用紙のストローでシャボンをしたため、机の上は石けん水だら

けになった。

三、四名の女児がそれをかきまわし、フィンガーペイントをはじめていた。

とおりがかりの子どもたちがちょこちょこ手を出して通りすぎていた。



そのうち、フィンガーペイントの手を握ってかきまわし、そっと拡げようとして、指に石けんの膜ができたのをみつけ、そっと吹いてみた。一つきれいなシャボン玉が飛んだ。

手のシャボン玉が飛んだよ この発見で、O子は机の上をかきまわしては手でシャボン玉をつくって飛ばしていた。そのうちシャボンの膜が口にくっつき口でもシャボン玉が飛んだのだ。

以上のように、文字どおり、室中石けん水だらけになって一日中楽しくシャボン玉あそびをした。思う存分あそんだあとの片づけは全員が変ったようによく片づけた。すぐ石けんの水になってしまうバケツの水をかえる子、ぞうきんでふく子、くるくるとよく働いた。「先生ときどき、シャボン玉やろうね」「おもしろかったね。あんたの大きくなったね」「われる時、フスンだってね」など、楽しい会話は長く長くよいんを引いていた。「わー、シャボン玉やるとそーきんがきれーにまっ白になるね、先生」とおどろいた、大発見にみんな大笑いをしていた。

以上の経験から、私は四六名一人のこらずこんなに真けんに取りくんだ活動はないと思う。

・活動をいやがったり、途中でなげ出してしまう子がない。

・どんなに集中力のない子も真けんにシャボン玉を作ろうと努力した。

・このように自然に子どもひとりひとりの小さい創意が全員に浸透していった。

・この活動中、一つのあらそいもおこらなかった（抵抗をあたえない）。
・個々の子どもか問題意識を多く持ち、なんとか解決しようとして、何らかの形で解決していった。（大きくしたり、くっつけたり、ふたこかつくりたい）
・くりかえし、ねはり強く取りあけた。
・素直に個々の子どもか感情を表わしてくれた。

よろこびの感情

・頭だけてよろこぶ
・手足をうこかしてよろこぶ
・体全体でよろこぶ
・体と声とてよろこぶ
・ひとりだけでそっとよろこぶ
・よろこひを友たちにつたえようとする子
・友たちのよろこひを自分もいっしょによろこぶ

困った時の感情

・頭たけて困る
・手足を動かして困る
・体全体で困る。
・体と声で困る。
・ひとりたけで困る。
・友たちに伝えて助けてもらう。
・友たちの困ったのを見て、自分もいっしょに困り、他の子に助けてもらって、いっしょに考える。

などの感情の表わし方をする子があることを具体的にみることができ、今後の指導のよい道しるべを得ることができた。

私たち教師はともすると、シャボン玉は自然の領域で石けんの濃い、薄いをつくって、その関係を知らせたり、風とシャボン玉の関係を知らせたり、吹き方とシャボン玉のでき方を考えさせるので、七月にやれはよいと概念的に（保育行事的に）考えてしまっているのではないでしょうか　私は七月と九月の二回シャボン玉あそびをしてみて、教師の保育活動の年中行事的考え方の片よりとせまさをしみじみと感じさせられたのです。子どもたちは、一回目の経験をもとに活動を発展させていく力を全員が持っていることをはっきり知ったのです　ただし、ほうりっ放しではだめです。環境を整え指導の時期と興味が一致している時に与えなければ、おもしろいように子どもたちは活動を発展させていくことはできないのです。活動の途中で、あまり指導意識を出さず、環境をもりあげてやり、じっくり見守ってやりたいものたと強く感じたのです　教師はもっと子どもの力を信用してまかせたいものです。

（東京・関屋幼稚園）

現代のカウンセリングとエミールの教育論との比較

――遊戯療法を中心に――

並河信子

★問題

近年、相談室（所）などで心因性の多様な問題をもった成人に対してはカウンセリングによって、児童に関しては主として遊戯療法によって、その問題を解決することが実施されており、事例・治療者によって程度の差はあるが効果はあがっているといえよう。事例の問題解決に参加している治療者は（カウンセラー或いはセラピストなどと呼称される）治療経過・効果・技術の検討など多くの問題に直面している（その詳細については諸氏により本誌七月号、幼児教育と心理療法の特集号にのべられている）。私も児童相談室の一員として、主として幼児を対象に遊戯治療に当っているが、治療経験からすると治療者の治療に関する思想というか、治療哲学が、さらに治療者自身の心身の健康の問題が、人間が人間を相手にする問題だけに重要な要因となってくることが痛感される。

関係療法を実施しているアレンは、その著書「問題児の心理療法」[1]の終章〝治療哲学〟の中で、プラトンが二三〇〇年以前にかいた「共和国」の中にのべられている、くさりにつながれて地下の洞穴の中にいる人たちを太陽の光の中につれていくまでの対話を例にあげ、これは人間の成長が意味深くかかれているとし、現代の心理療法と比較しながら、治療者は光の側に立つべきである、事例をくらやみからすぐ光の中につれていってはならないなど検討を加えつつ、自己の治療哲学をうちたてんとしているが、ここに技術にのみ走らないアレンの真執さがあると思う。

たんに遊戯療法といっても来談者中心療法（あるいは非指示的カウンセリング）・精神分析・関係療法などいくつかの学派が考えられるが、今回は来談者中心療法とエミールを比較した。前者のテキ

ストにはアックスラインの著書(2)「遊戯療法」の八原理を中心とし、その思想のよりどころであるロジャーズの二、三の著および彼の自伝ともいうべき「私を語る」(3) This is me を加えた。エミールは五才までの教育論である第一篇、十二才までの教育論である第二篇を用いた。たんに心理療法といっても幼児および児童は（事例により差異はあるが）カウンセリングよりは遊戯療法が適用されるが、ちょうどエミールの第一篇・第二篇(4)はその年令に該当する教育論と思われるので、五篇までのうちこれらの篇のみを選んだのである。しかし今回は幼児教育論である第一篇を中心にのべる。次にルソーの著「エミール」との比較を試みた理由をのべる。

（a） 治療原理・方法が活用され治療が完全に行なわれたときそこにみられる人間像と、教育論で求める理想像とは合致するのではないかという仮設をもった。

（b） 今日の教育思想には大体四つの流れ(5)、すなわち進歩主義・本質主義・永遠主義・社会改造主義が考えられるが、ロシャーズの思想は進歩主義的思想の基盤の上に多くのものが加味されている（例えば実存哲学・禅的思想など）と思うが、進歩主義の思想に積極的な影響をあたえたエミールとの比較は、ロシャーズが直接的な影響を受けなかったとして(6)も来談者中心療法を理解するために意義があると思う。

（c） ウィリアムソンは非指示派の人々とルソーの思想の類似を認め、さらに両者とも外的要素を無視しがちであると批判を加えている(7)が、エミールとの比較は、来談者中心療法を検討するためにも必要と思う。

（d） 来談者中心療法とエミールとの比較研究は多少あるとしても、私は両思想の求めんとしたものの比較に興味をおぼえ探ってみたいと思った。とくに現代の遊戯療法の原理とエミールの幼少期の教育論との比較に関心をもった。

（e） 「エミール」に多くの影響をあたえたション・ロックの教育論との比較、さらにフレーヘル・ペスタロッチーらの教育論と現代の治療論との比較も試みんとしているが、まず現代の教育に直接間接に影響の多いエミールとの比較を試み今後の比較の参考に供したい。

以上いくつかあけてみたが、結局は現在実践している自己の遊戯療法のよりどころに供するために、この比較を試みたのである。すなわち昨年の夏来日したロジャーズから京都大学と茨城キリスト教学園で講義を受けたが、再々彼の思想のよりどころを受講者たちが問うたが確答はなく、却って各治療者が自分の治療思想を自我の中にうちたてるべきだということを学んだのである。エミールとの比較は私の治療哲学の確立に役立つのではないかと思い、私自身の遊戯療法のよりどころになにか供するところがあれはと、来談者中心の遊戯療法の原理と「エミール」との比較をこころみんとしたのである。

★ 手続き

ルソーのエミールを、また現代の来談者中心療法を、それぞれ理解することさえ困難であるのに、さらにそれらを比較することは容易なことではないが、今回は現在の私にとってできる範囲で試みることにした。

アックスラインは遊戯療法の基本原理として八項目をあげ、おのおのに詳しい意見を述べ事例をあげている。項目のみをあげると次の如きものである。

(一) **ラポートの確立**（治療者はできるだけ早くよいラポートができるような、子どもとのあたたかい親密な関係を発展させねばなりません。）

(二) **子どもを完全に受け入れること**（治療者は子どもをあるがままに受け入れます。）

(三) **おおらかな気持をつくりあげること**（治療者は子どもが自分の気持を完全に表現できるような自由感を味えるように、その関係におおらかな気持をつくりだします。）

(四) **感情の認知と反射**（治療者は子どもの表現している気持を油断なく認知し、子どもが自分の行動の洞察が得られるようなやり方で子どもの気持を反射してやります。）

(五) **尊敬心を持ちつづけること**（治療者は、子どもにそのようにする機会があたえられれば、自分で自分の問題を解決しうるその能力に深い尊敬の念をもっています。選択して、変化させる責任も子どもの責任です。）

(六) **子どもが先導します**（治療者はいかなる方法でも子どもの行ないや会話を指導しようとしません。子どもが先導するのです。治療者はそれに従います。）

(七) **治療はせかないこと**（治療者は治療をはやめようとしません。治療は緩慢な過程であって、治療者はその緩慢な過程であることを認識しています。）

(八) **制限の意義**（治療者は治療が現実の世界に根をおろし、子どもにその関係における自分の責任を気付かせるのに必要なだけの制限を設けます。）

以上は来談者中心の遊戯療法原理であるが、これに対して「エミール」は教育論である。背景となる時代、社会も異るし、さらに思想の系譜の比較および実際上の方法の細い点などについてはその比較に相当の限界があると思われる。しかしそれらは今後に託するとしてまずエミールを再読し、アックスライン、ロジャーズらの思想に何らかの意味で関係があるものをひきだし、(a) 共通点を感じる意見、(b) 問題や抵抗を感じる意見、(c) 相違すると考えられる意見等に分類してみた。しかし問題点と相違点、或いは類似点と問題点が共存するような内容もあるなど、分類が困難な思想もいくつかみられた。

★ 比較

アックスライン遊戯療法原理とエミール第一篇との比較

第 1 表		エミールに見られる類似意見	問題意見	相違意見
I	ラポートの確立			
II	子どもをあるがままに受け入れる	力を全部つかわせる（自然が子どもに与えた力は全部これを子どもに使わせねばならない）P70		病身な子どもは預らぬ（私は病身な子ども，虚弱な子どもは仮令80までその子どもが生きのびるとしても預りたくない）P51
III	おおらかな関係をもつ	自由を多く権力を少なく（右に列挙した格律の精神は，子どもにより多く真の自由をあたえ，権力をより少なくしか与えないことにある）P81		
IV	感情の認知と反射	子どもをよく研究する（注意深く子どもの言語や動作を研究せねばならない）P81		
V	子どもを尊敬する	境遇と習性（同一の境遇に止っている間は，人々は習性から生じた甚だ不自然な傾向を保存していることができるが，境遇が変化するや否や，この習性は止んで自然性が復活してくる）P20		
VI	子どもが先導する	自然の発見（彼は生徒に何も与えてはならない）P48（彼らにとっては彼ら自身がすることの他は一切万事まずくゆくのだ）P57自分で実行する（真の教育は他から教えることよりも自ら実行させることにある）P27	指導者について（立派に教育される為には子どもはただ1人の指導者のみに導かれねばならぬ）P50	
VII	治療をせかない	功を急がぬ（子どもに本来の力を回復させることは徐々にやって初めてできるのであるから功を急いではならぬ）P63～64		
VIII	制　　限			

I　エミール第一篇と遊戯療法原理との比較

比較そのものに関して問題も多いと思うが前述の手続きのもとに分類したものが第一表である　すなわちアックスラインの各項目について比較すると、治療初期にとくに必要な思想である(一)の原理はこれに関係する思想はエミールにはみあたらないようである　アックスラインの重視していると考えられる(二)に関しては表の如く類似面と相違面とがみられる。(三)、(四)、(五)に関しては一箇所ずつ類似点がみられる。(六)は来談

問題意見	相違意見
要は何もしないのを避けることである。 単に風に逆って船を進めるというだけの時には船の進路を変えればよい。しかし狂瀾濤の中に踏み止まろうとするためには錨を下さねばならぬだろう。（P25～26）もしできるなら教師自身が，子どもだといいと思う。（P46） 世間の普通の人の教育の模範として役立つのは，普通の人間の教育のみである。普通の人以外の人は何をされようともそれには頓着なくひとりで成長してゆく。（P48） ……私は教える子どもを富者から選ぶ。そうすれば少くとも一人だけ真実の人間を増したことになるのだ。貧者は自分の力だけで立派に人となってゆくのだから（P49） 大づかみに薬は全人類に有害だというのである。（P58） 決して乳母と議論をしてはならぬ。命令して乳母のすることをみているがいい。そして十分意を払って諸君のだした命令を実行し易くするように心掛けるがいい（P66） 私は世人が子どもに新奇なものや，醜い厭わしい，珍奇な色々の動物などを努めて見せることをのぞむ。しかし始めは少しずつ遠くから見せ，徐々にそれに慣らして，やがて人がそれを手にとって見せ，遂には子どもが自分で手にとって見るようにさせたいものである。	（P71） 絶えず苦しむのが，人間の運命である。（P39） けれども彼は私以外の人に従ってはならない。これが私の第一のというよりもむしろ唯一の条件である。私は生徒と教師は互に一心同体であって，一生の運命を共にすべきものだと考えて貰いたい。（P50） 私は病身な子ども，虚弱な子どもは，仮令80までその子どもが，生きのびるとしても預りたくない。私は，いつも身体の保護にばかり没頭して，いつまでも彼自身にも他の人にも役に立たぬような人を預るのは真っ平だ。（P51）

者中心療法の根本思想と解するが、これと量的、質的に類似する思想がエミールに多くみられるのは興味ある点と思う。（表以外にも二、三あげられる）(七)についてのべられている箇所は少ないが質的に近いと思う。(八)に関しては具体的に類似した言葉がみられるというより全体にこのような思想が流れていると思う。しかし第一篇はエミールの全篇をとおしての序論的要素も多いために第二篇に比して五才迄のことが量的に少ないため、アックスラインとの比較ができる内容が少ない。さらに身体の問題が重視されている。金銭・約束・欲望・うそについてなどプレイルームに適用される遊戯治療論と比較しにくい問題が多いと思う。

Ⅱ　エミール第一篇と来談者中心療法との比較

なお来談者中心療法の基本的な思想（第二表の左側）と比較することにした。類似・問題・相違を感じた意見に分類してみたものが第二表である。それらから次のようなことが言えるのではないかと思う。すなわち人間性の善に期待するという考え方は似ている。さらに表現は違うが弱は悪であるという考えが両者にみられるように思う。次に相違とも類似とも分類できないものを問題点としたが、それだけに課題も多く、貧富に対する問題、女性観、しつけ方などの意見に抵抗を感じる。相違点としてはロジャーズらはあらゆる人間を受け入れようとしているが、ルソーは自分の育てたい子どもをえらび、虚弱な子どもはうけつけようとしない（しかし、これはさ

第 2 表　来談者中心療法について	エミール(1)に見られる類似意見
カール・ロジャーズ (1) 彼は治療の中に「感情の承認」という反応を組織的に利用することを創唱した。 (2) 彼はこれまでの心理療法家一般――その立場を問わず――の週辺にくすぶっていた神秘的な迷路を断ち切った。そしてランク派の「クライエント中心」の哲学に明確な技術を与えたのである。この哲学の技術化は不可能であると，ランクもタフトもアレンも公言していたのである。 (3) それと同時に，彼はクライエントの「受容」という概念に，新しい，もっと明確な，さらに深い意味をあたえたのである。 (4) セラピストは，診断や診断的配慮に関する先入観を放棄し，専門的評価をなす傾向をすて正確な予診をなそうとする努力をやめ，人を巧みに指導しようという誘惑を克服し，ただ一つの目標に努力を集中しなければならない。その目標というのは，前には意識に否定されていた危険な領域に一歩一歩ふみこむその瞬間瞬間に，クライエントが意識的に保持している態度を深く理解し，受容するということである。 (5) セラピストがこのような機能をはたし，この新しい「受容」の概念を実行に移した結果，クライエントは指導なしに洞察に達成し，生活に対してより幸福なよりすぐれた全体的な適応をなすことができる，という証拠が，積みあげられることになったのである。	私にできることは私の意見に決して満足しないことだ。私の意見のみが世界中で最も優れたものだと決して自惚れないことだ。（P12） 凡そ一切の計画には二つの注意すべき事項がある。第一はその計画が絶対的に善であるということであり，第二はその実行の容易であるということである。（P13） 彼自身以外にはもはや他人の教導を必要としなくなるまで，この想像上の生徒を教育してみようと決心した。（P45） 一切の悪は弱いことから生ずるものだ。子どもは弱くなければ悪くない。強くしてやればよくなる。（P78）

伊東博訳編カウンセリングの基礎（P83～84）

らに検討を要すると思う）。

★考　察

まだ考察途上であり多くの検討すべき課題が残っており、問題提供にすぎないと思うが、一応上述の如き諸点があらわれた原因について課題をあげ、考察を加えてみよう。

＜一、類似点について＞

a、もっとも個性的なものはもっとも普遍的である。

この課題は「私を語る」の中で〝もっとも報われた経験は他人と非常な共通性をもっていると感じたことである〟としてつづいて課題のことばがでているので借用したが、意味深いことばだと思う。一八世紀にかかれたエミールも現代のロジャーズの思想も非常に個性的と言いきれると思う。時代も異り、育った環境、性格も相当異なっていると思われるが、思想の形成に共通点がみられる。すなわち両者とも、かりものでなく独自の思想を展開していることは同じと思う。ロジャーズは若い日、神学や哲学を学んでおり、間接的な影響は受けているにしても直接には影響は受けていないようである。すなわち「私を語る」の中でルソーの思想と殆んど近い思想をのべながら（それはアックスラインの(七)の原理と共通した思想であるが）〝こうした思想はあまりききなれない見解であって、東洋的見地にも近いということをよく知っております〟と述べているところ

などからである。しかし各人がそれぞれ個性をもっていかに生きるか、人間はいかなる状態にあるべきかというテーマに対決した場合真摯である程また普遍性がみられるのではないかと思い、ルソーと来談者中心の思想の共通点をまずこのように解釈したいと思う。しかしこの課題であると個性的な思想はみな共通してくるようにもとられるが、まずこの問題をあげ更に考察を進めたい。

b、消極教育と評されがちで積極教育である。

ラッセルはその著「教育と社会体制」の中でルソーの消極説について論じ、稲富氏もその著書「ルソオの教育思想」の中で消極教育と自発活動の原理についてのべている。一方ロジャーズも「私を語る」の中で〝私が私の現実や他人の現実に開かれていればいるほど、物事を急いで処理しようと焦らなくなる〟とのべ、〝このような積極的でない考えを一体どうしてもつことができるでしょうか〟とのべている。両者とも外的には消極的にみえがちで、さらに評せられがちでありながら、最も積極的なものというか、はげしさをもっていると思われる。すなわち一例をあげればアックスライン(七)の原理のことをロジャーズも強調し、ルソーもまた各所（第二篇）で同意見を力説しているが、このあせらず本物の自発活動をまつことこそ消極的に見えて本物の積極的教育ではないかと思う。なお興味あることは、両者ともそれぞれ自分のこの意見を逆説的なものとしていることである。

〈二、問題点について〉

a、遊びで治療することについて

アックスラインのプレイセラピーの書名のごとく遊ぶことによって治療する、遊ぶこと自体が自己目的であるという考え方そのものがルソーの〝十二才までは理性の睡眠である〟という知的早教育排撃の思想と共通していると思う。孤立したことば・読書および学習などにたよらず、もっとも自由な自己表現である遊びに期待するところが両者の思想の似たところではないかと思う。なおアックスラインの、(五)、(六)に該当する箇所がエミールにもっとも多く見られるのもそのゆえんと思う。しかしおしつけた学習をさせないということは似ているが内容的にはちがいもあり、これは教育論と治療論とのちがいからもきていると思うが今後検討を要する問題と思う。

b、自然性を重視する

その個人が持っている自然の力を両者が非常に重視し、期待していると思われるところが各所というよりもむしろ両者の全体に一貫して流れていると思う。人間の内面的なものを重視する、自己以外の力を過大視しない、あそびそのものを自己目的とする、児童本位であるなど両者に類似している思想はこの課題に全部含めても差支えがないのではなかろうか。しかしこの類似点は問題点も含んでいると思う。すなわちこの共通点がウィリアムソンをして批判させたごとく、外的要因を重視しないという弱点として批判される原因にもなっていると思われ、この課題を追求したらある程度解決される

のではないかと思う。なおロジャーズは科学は治療家を作ることはできないけれども治療家を援助できるとし、さらに科学を重視しているが、両者の科学に対する思想のちがい、時代のちがいよりくる科学のちがいなどの検討をすればなにか示唆をあたえられるのではないかと思う。

＜三、相違点について＞

a、教育実践の問題

ペスタロッチーが身をもってした実践から教育理論をうちたてたのと異り、ルソーは人間的経験、追求はゆたかであったが、教育実践が伴わないということがいえよう。これに対してアックスラインやロジャーズは常に実践をつづけ、アックスラインの著「遊戯療法」の後半は実際経験の記録である。

b、知情意の問題

稲富氏が「ルソーの教育思想」において述べられる如く、ルソーは知情意の中で情の面がとくにはげしいと思う。一方アックスラインやロジャーズはともに知情意の均斉がとれており、その主張することも偏りを感じないと思われる。しかしロジャーズは治療の中に「感情の承認」という反応を組織的に利用することを創唱したのであり、知情意に関しては、今後追求すべき課題の一つではないかと思っている。

★ 結　論

今回の比較から両者の求めんとしたものに何か共通の流れを感じた。さらに質的・量的にはいろいろ興味ある異なりをみせながら来談者中心の思想に何らかの意味で関係あると思われる思想がエミールの各所にみられた。自分自身の遊戯療法に対する手がかりとしては、治療はあせってはならない、子ども（事例）のもっている力を大切にするなどについて考えさせられた。さらにこのような比較をすること自体が、実際の遊戯療法をするときに重要な安定感をあたえるのではないかと思った。研究方法など難点も多く検討すべき問題が多くのこされているが今後に託したいと思っている。

後記　最近ルソーとロジャーズの間にある系譜を求めたウォーカーの論文・およびそれに対するロジャーズとシュナイダーの論文を伊藤博編著「カウンセリングの理論」により興味深くよみました。それによりますとロジャーズはルソーから直接的影響を受けていないようです。それらを今後参考にさせていただくことにし、今回は第十五回日本保育学会で発表したものを中心にまとめました。

（大阪市立大学児童学研究室）

1. アレン著　黒丸正四郎訳　問題児の心理療法　みすず書店
2. アックスライン著　小林治夫訳　遊戯療法　岩崎書店　昭和二八年
3. ロジャーズ著　村上正治訳　私を語る　茨城キリスト教学園・カウンセリング研究所　一九六一年
4. ルソオ著　平林初之輔訳　エミイル　第一篇　第二篇　岩波書店　昭和二七年
5. 鰺坂二夫著　教育原理　玉川大学出版部　昭和三三年
6. 伊東博訳編　カウンセリングの理論　誠信書房　昭和三七年
7. 伊東博訳編　カウンセリングの基礎　誠信書房　昭和三五年

日本幼児保育史の研究

日本保育学会共同研究小委員会

〈四十〉 三十年代の幼稚園の保育内容

明治二十年代から三十年代にかけて、全国各地に誕生していった幼稚園は、その後どのような保育内容をもっていたのであろうか。

明治二十九年に関東では東京のフレーベル会が設立されたが、翌三十年には関西の三市、京都、大阪、神戸では連合保育会が誕生するなど、三十年代は幼稚園が名実ともに着実な発展を示した時であったといえる。

わが国最初の幼稚園、幼稚遊嬉場開設以来二十余年、明治三十二年六月に、改正された小学校令の中に初めて幼稚園に関する規定が含められたことは、当時幼稚園がかなり大きな存在となってきていたことを示している。すなわち、それ以前は、各園における幼稚園規則や規定があったし、また大阪市のように市の規則を定めたところもあったが、文部省令として公布され、幼稚園の法的な基礎が定められたのは三十二年の「幼稚園保育及設備規定」であった。

幼稚園保育及設備規定

明治三十二年六月

第一条　幼稚園ハ満三年ヨリ小学校エ就学スルマデノ幼児ヲ保育スル所トス

第二条　保育ノ時数（食事時間ヲ含ム）ハ一日五時以内トス

第三条　保姆一人ノ保育スル幼児ノ数ハ四十人以内トス

第四条　一幼稚園ノ幼児数ハ百人以内トス特別ノ事情アルトキハ百五十人マデ増加スルコトヲ得

第五条　保育ノ要旨ハ左ノ如シ

一、幼児ヲ保育スルニハ其心身ヲシテ健全ナル発育ヲ遂ケ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ家庭教育ヲ補ハンコトヲ要ス

二、保育ノ方法ハ幼児ノ心身発育ノ度ニ適応セシムヘク其会得シ難キ事物ヲ授ケ或ハ過度ノ業ヲ為サシメ又ハ之ヲ強要シテ就業セシムヘカラス

三、常ニ幼児ノ心性及行儀ニ注意シテ之ヲ正シクセシメンコトヲ要ス

四、幼児ハ極メテ模倣ヲ好ムモノナレハ常ニ善良ナル事例ヲ示サンコトニ注意スヘシ

第六条　幼児保育ノ項目ハ遊嬉、唱歌談話及手技トシテ左ノ諸項ニ依ルヘシ

一、遊嬉

遊嬉ハ随意遊嬉、共同遊嬉トシ随意遊嬉ハ幼児ヲシテ各自ニ運動セシメ共同遊嬉ハ歌曲ニ合ヘル諸種ノ運動等ヲナサシメ心情ヲ快活ニシ身体ヲ健全ナラシム

二、唱歌

唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ歌ハシメ聴器　発声器及呼吸器ヲ練習シテ其発育ヲ助ケ心情ヲ快活純美ナラシメ徳性涵養ノ資トス

三、談話

談話ハ有益ニシテ興味アル事実及寓話通常ノ天然物人工物等ニ就キテ之ヲナシ徳性ヲ涵養シ観察注意ノ力ヲ養ヒ兼テ発音ヲ正シクシ言語ヲ練習セシム

四、手技

手技ハ幼稚園恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ練習シ心意発育ノ資トス

第七条　幼稚園ノ設備ハ左ノ要項ニ依ルヘシ

一、建物ハ平屋造トシ保育室遊嬉室　職員室其他須要ナル諸室ヲ備フヘシ

保育室ノ大サハ幼児四人ニ就キ一坪ヨリ小ナルベカラズ

二、遊園ハ幼児一人ニツキ一坪ヨリ小ナルベカラズ

三、恩物、絵画、遊嬉道具、楽器、黒板、机腰掛、時計、寒暖計、煖房器其他須要ナル器具ヲ備フヘシ

四、敷地、飲料水及採光窓ニ関シテハ小学校ノ例ニ依ルヘシ

この「幼稚園保育及設備規定」はそれまで各園にあった規則や規定にくらべてかなりの進歩をみせたものといえる

このなかで、保育項目を遊嬉、唱歌、談話、手技の四本立とし、それまで、積木、鐶排、紙刺シ等と各々の項目としてとりあつかわれていた恩物による作業が「手技」という形にまとめられていることは興味がふかい。

ところで、当時の実際の保育内容はどのようなものであったろうか。それを知るものとして、柳池幼稚園に古い「保育案」がある。

この柳池幼稚園は、最初の幼稚園として京都に誕生した幼稚遊嬉場が一年余で廃園し、二十年代に入って再興されたものである　すなわち、相次いで京都に設立された幼稚園のうち、十四番目のものとして二十六年四月三日、柳池教育会の事業として私立柳池幼稚園という形で再開された。当時の園児は男児　三十八名、女児　二十七名、計六十五名でこれを二組に編成していた。

そして「京都市柳池幼稚園規則」にあるような様子であったと思

われる。この制定年月日は明らかでないが、三十二年の文部省令前後にあったものと推察できる。

京都市柳池幼稚園規則

第一条　本園ハ学齢未満ノ幼児ヲ保育シ、其心身ヲシテ健全ニ発達セシメ善良ナル習慣ヲ養ヒ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス

第二条　保育課目ハ遊戯、唱歌、談話、手技トス

第三条　幼児ノ年齢ハ満四歳ヨリ小学校ニ就学スル迄トス

年齢ニ依リテ之ヲ二組ニ分ツ

一ノ組　満五歳ヨリ就学ニ至ル迄

二ノ組　満四歳以上五歳ニ至ル迄

第四条　幼児ノ定員ハ凡百名トス

第五条　保育年限ハ二ケ年トス　六ケ月以上保育ヲ受ケシモノニハ保育証書ヲ授与ス

第六条　一日ノ保育時間

春秋期四時間半

夏期　三時

冬期　四時間

（以下十二条まで。後略）

保護者ヘノ要求

一、家庭トハ成ル可ク保育ノ方針ヲ一致セシメタキ故心附カレタル件ハ忌憚ナク申出デラルベク又家庭ニ於ケル状況ヲ懇話セラレンコトヲ望ム

二、幼児ノ着服ハナルヘク軽便質素ヲ旨トセラレタシ

三、必用ノ携帯品ハ紙、手拭、草履トス

四、所用ノ帽子、傘、外套、弁当、草履並ニ袋手拭其ノ他身体ニツケザル物ニハ必姓名ヲ附記セラレタシ

五、附添人ヲ要セス止ムヲ得サル場合ニハ性質純良ノモノヲ選ビテ附ケラレタシ

六、玩具ハ貸与スレバ成ルベク家庭ヨリ持来セシメザル様ニ注意セラレタシ

七、幼稚園ニ於テ貸与スル共同玩具ハ船、砂遊、木馬、網引、輪ハメ、鈴馬、太鼓、細工犬、魚釣り、フートボール、皮毬、糸トリ、絵本類トス

この「規則」にみられるような保育形態が二十年代後半乃至は三十年代にとられていたと思われるが、実際の保育内容を当時の柳池幼稚園の記録からみてみよう。柳池幼稚園には現在、当時の各組の保育案がのこされているが、これらをとりあげることによって、三十年代前半の保育の様子をある程度知ることができる。

明治三十二年度から三十四年度までの保育案をその対象とするが、三十二年度のそれと三十三年度のものとは、その書き方の形式がやや違っている。すなわち、三十二年度のものは「保育按」となっており、一頁が一週間分の保育案を記入するようになっている。

これが、翌三十三年度からは一頁が三日分となり、したがって保育の計画がより詳細に具体的に記されるようになっていることは興

味ぶかい。また、一頁には先にのべたように時間表が記載されている。

これらは、いずれも綿密に毛筆で記されたものであるが、その形式は説話、作法、手技、唱歌、遊嬉、の順で書かれている。「手技」の項にはその製作の順序をはじめ、一定の型、がやはり「教えられた」ことを示しているが、受珠幼稚園における「保育要目草案」にある、

「材料間連絡ニツイテモ最モ用ヒタリ例ヘバ談話材料ニ用ヒタルモノハ成ルベクコレヲ唱歌ニモ遊戯ニモ又手技ニモ用フルガ如クセリ」

という考えと同様のものをみることができる。

一例として、三十三年度二ノ組保育案の複写をあげよう。

明治三十三年度　二之組保育按

時間表

日／時	第一時	第二時	第三時	第四時	第五時	第六時
月	会集	説話	積木	唱歌	摺紙	遊戯
火	同	同	環排	同	板排	同
水	同	同	貼紙	同	積木	同
木	同	同	織紙	同	貼紙	同
金	同	同	画方	同	箸排	同
土	同		豆細工	同		

二ノ組第二週自四月十六日至四月十二日

	説話	作法	手技	唱歌	遊嬉
月	獅子ト狼ノ話 或ル狼ガ牧場ヨリ羊ヲ見出シ餌ニセントヒ補エル処 辺ニ至リテ迄	同	箸排 三寸五本二寸八本ヲ排バシム キヘ牧場ノ形ヲ与ヘ	前週ノ続 馬ノうた 第二段	馬
火	狼ハ羊ニ捕ヘテ自分ノ家ヘ持チ帰ル途中ニテ図ズモ獅子ニ出合ヒテ命カラ々々後ヲモ見ズ逃ゲ行キシ処迄	同	板排 三角四枚四角一枚ヲ与ヘ狼ノ棲家ヲ排バシム	同	同
水	狼ノ庶物種類ト棲家ヲ話	同	積木摺紙 工夫ヲナサシム 黄色ノ紙ヲ与ヘ狐面ヲ摺シム		

以上にみるように、一番上段に書かれる説話が中心となって、それに関連した手技が行なわれていた。遊戯、唱歌も原則としては、説話に関連性のあるものがとられたようであるが、ない場合は類似したものか、まったく関係のないものでも用いられた。

「三十三年度一ノ組保育案」中の「俵藤太」の説話の項に、

「話ニ適当ナル唱歌アラザルニ付キ操練ノ歌ヲ教フ」

とあることは、こうした事情を示すものであろう。

なお、説話に関連したかたちで教訓がときどきみられるほか「作法」があり、幼児に日常生活のきまりや園での礼儀を教えていた。

これらの各保育課目について、(一)　どのようなものがとりあげら

れていたか、㈡ 他の課目とはどう関連づけられていたか、㈢ さらに、各組すなわち年齢差がどう考慮されていたかなどについてみてみよう。

一、説　話

三十一年度には、説話は週に一二〇分、すなわち毎日二十分ずつおこなわれていた。これが三十七年度になると「保育事項制定の趣旨」では、それが半分の六〇分になっている。三十二年度から三十四年度までの間は、そのいずれであったか分らないが、全体の関係と「保育案」に記されている内容からみると、毎日二十分程度はされていたのではないかと思われる。

説話はその性質上、年齢によって扱い方に非常な差があり、全体的にみると隔日に「説話」と「庶物話」がくまれている。

最年長である一の組の後半になると「庶物」はわずかになるが、最年少の三の組では、物語りと一般知識をひろめるための庶物話とが同等のウェート乃至は二対一位の割合で行なわれている。

この説話はどのようなものであったか、その物語りからどのような「庶物話」がひき出されたか、手技はどうそれらとむすびついていたかなどについて三十二年度三ノ組および二ノ組、三十三年度一ノ組の各保育案を分析しよう。

明治三十二年度

三之組保育案（自第六週（五月八日）より記入至第三十三週十二月二十二日）

説話	期日	どのような庶物話をしたか	手技	唱歌
○鶏ノ庶物 内回五で全部 鶏について　二 復習　二 感想をきく　一	5/8〜5/13	一、鶏	なし	からす
○犬ノ話 或ル一匹ノ犬人ニ物ヲ受ケシ物ヨリ大ナル物ヲ得ントシテ却テ我物ヲ欲シテ失ヒタル話　一 物語 ③復習　一 庶物　一	5/15〜5/20（註 以降右の要領でまとめた）	一、犬	一、積木—橋 二、箸排—犬食器 三、繋方—頸輪	
○燕ト鯉幟ノ話 ⑤物—二 復—二 燕庶物　一	5/21〜5/27	一、燕	一、板排—燕巣尾根池ノ鯉 二、貼紙—同 三、箸環—鯉ト水	
○犬 ⑤物—二 復—二 庶—一 感想—一	5/29〜6/2	一、犬	四、摺紙—家 一、箸環—家	
○兎ト亀ガ走リクラベヲナセシ話 ⑤物—一 復—二 庶—二	6/5〜6/9	一、兎 二、亀	一、板—山 二、積—池 三、箸環—兎 四、摺紙—亀	兎々

○舌切雀
⑩（物 一〇）

6/12〜6/23

一、板―井戸
二、貼―井戸
三、箸―すずめ かご
四、環―はさみ
五、板―門
六、摺―雀
七、箸―膳
八、木積―ツヅラ
九、環―宝
一〇、木積―門
十一、板―ツヅラ
十二、貼―ツヅラ

舌切雀

○月と雲との話
⑤（物…五）
（悪をなせば悪の報ひあり）

6/26〜6/31

一、環―月
二、箸―カサ
三、板―家
四、摺―三ぼう

○猿蟹仇討話
⑭（復庶物 一五八）

7/3〜7/21

二、猿（一、部分 二、性質）
三、蟹
四、柿
五、栗

一、環箸―握飯
二、箸―木
三、環―柿
四、積―猿ノ家
五、摺―柿
六、板―蟹ノ家
七、環―柿トカゴ
八、積―石垣
九、箸―石臼
十、箸―柿ノ枝
十一、貼―栗
十二、箸―馳走
十三、積―イス
十四、箸―火鉢ヨリ栗ノハジケシ所

○雉ト熊ノ戦争
（弱キモノモ悔レバ負ケル）
③（物 三）

7/26〜7/28

一、木積―山
二、環―鳥
三、摺―鳥

○兄弟梨子ヲ分チシ話
（譲リノ念ヲ養成ス）

9/4〜9/8

一、梨子

一、環―梨子
二、箸―梨子ト木
三、貼―葉

梨子クイ

○小狼母ノ教ヲ守ラズシテ蝶ヲ放ツ話
⑤（物問答 庶復 一一二）

9/11〜9/15

一、蝶

一、摺―蝶
二、環―花

蝶々

○蟻ト蟲螽ノ話
⑤（復庶物 一一三）

9/18〜9/21

一、蟲螽

一、積―蟻道
二、箸―虫カゴ
三、貼―茄子

蟻のうた

○鴉ト蛇ノ話
⑤（復庶物 一一三）

9/25〜9/29

一、鴉

一、箸―木ノ枝
二、環―鳥
三、貼―柿
四、摺―鳥

鴉のうた

○勝々山ノ話
㉓（復庶物 十
三五五）

10/2〜11/3

一、茄子
二、古狸
三、臼ト杵
四、兎
五、舟

一、積―家
二、貼―臼
三、箸―物置
四、板―狸ノ巣
五、箸環―キネ
六、箸―家
七、環―ウス
八、貼―ワン
九、箸―膳
十、板―狸ノニゲ道
十一、摺―狐
十二、環箸―兎
十三、箸環―オノ
十四、貼―ヒウチ
十五、板―山
十六、箸―摺鉢
十七、積―川

説話	期日	庶物	語手技	唱歌
○兎ト亀 ⑥庶物 二四	11/6～11/10	一、兎	六、貼—摺鉢	
		二、亀	五、箸—舟	
			三、板—舟	
			二、環箸—兎	
			一、摺—舟	
			三、箸貼—兎山ト日	
			四、板亀	
			五、摺—亀	
○桃太郎 庶物 二七	11/13～11/24	一、川	一、環箸—川ト桃太郎	遊嬉 唱歌に
		二、桃	二、貼水ト桃	
			三、箸川ト桃	
			四、板家	
			五、摺家	
			六、箸—キネ臼	
			七、貼—団子	
○猫ト雀 ⑤庶物 復習 二一	11/27～12/1	一、猫	一、箸—カスゴメ	小猫
		二、雀	二、摺—雀	雀—幼児ヲシテ択バシテムとある。
○花咲爺 ⑤物 五	12/4～12/8		一、箸環—犬	
			二、木積—爺	
			三、貼—犬	
			四、板家	
			五、摺板—家、垣	
			六、箸—花	
			七、板—馬	
			一、箸—家	
○かちかち山復習	12/11～12			
	12/12～12/15			

説話	期日	庶物	語手技	唱歌
○蜜柑	12/18		二、積—門	蜜柑ウリのうた
			三、貼—兎	
			一、箸—三宝ミカント	
			二、貼—蜜柑	
			一、摺—人	
○象 庶物 二一 (悪事ヲナセバ悪報アリ)	12/19～12/21	一、象		
以上三十二週（十二月廿二日まで）				

明治三十二年度

二之組保育按（自第六週（五月八日）至第四十五週（三月二十八日））

説話	期日	庶物	語手技	唱歌
○花咲爺（修身） ㉑庶物十六 五	5/14～6/11	一、人ノマネ	一、積—家	花咲春
		二、幼児ノ行儀	二、画—梅	
		三、幼児ノ行儀	三、箸—梅	黍団子四郎ノ歌
		四、桜ノ花	四、豆—盆	好ム所ノ団子ナリ
内牡丹		五、桜ノ花	五、板—鉢	桜
			六、貼—臼	
			七、縫—円	
			八、豆—臼	
			九、貼—キネ	
			十、摺鉢	
			十一、積—門	
			十二、画金箱	
			十三、箸金箱	
			十四、豆—金箱	

註 各日に「修身」「庶物」とことわってある。

例 五月二十一日の「四郎の所」ところは「爺さんの所」のみにて隣の所の事の悪きのみ其にはつきてはなす」

○桃太郎 修復庶物 四七九
6/12〜7/7
一、川 二、桃 三、犬 四、雉 五、舟 六、門 七、柴

注 六月十六日まで修身、庶物と説話の項に註がついている。

○金太郎 ⑨ 復庶物 一四四
7/10〜7/21
一、鉞 二、橋 三、武士 四、別レ

○燕ト鯉幟ノ話 物 三
7/26〜
一、鯉

一、板―川ト舟
二、貼―桃ト舟
三、積―橋ト舟
四、織―橋
五、画―家
六、摺―菊皿
七、箸―家
八、豆―旗
九、貼―桃ノ葉
十、積―橋
十一、画―征
十二、縫―桃
十三、箸―舟
十四、摺―ほかけ舟
十五、豆―舟
十六、貼―舟
十七、積―軍艦
十八、織―舟
十九、箸―箱
二十、摺―三宝
二十一、板―門
二十二、貼―かぶと
二十三、織―門
二十四、豆―三宝

桃太郎 忠塊義胆　軍艦　進行 桃太郎　ここなる門

一、板―土俵
二、貼―鉞
三、積―土俵
四、画―橋
五、摺―舟
六、縫―舟
七、箸―兎
八、摺―かめ
九、豆―橋
十、画―山
十一、箸―刀
十二、摺―かぶと
一、画―燕巣
二、摺―鯉

燕 池ノ鯉

○一寸法師（因果応報） 庶一
⑩ 庶物 四六
9/4〜9/15
一、燈籠 二、椀 三、川 四、寺

○廻り燈籠 ⑤ 庶物 二三
9/24〜9/29
一、燈籠 二、虫

例
①或庭先ニ石燈籠アリ其ハ何時モ淋シク暮シ居レリ其所ヘ一ツノ火取虫ガ来リテ火ヲ分ケテ下サイト云フ所マデ話ス
②前ノ続キヨリ石燈籠ノ所ヘ火取虫来リテ火ヲ乞ヒタレドモ貰レズ遂ニ縁側ニ沢山廻リ燈籠ニ火ヲ付ケテアル故ニ其火ヲ取リニ行キタク遂ニ火ハ取レスニ油ノ中ニ落チテ死シタリ
③前ノ続キヨリ或日石燈籠ハ何時モ淋シキ故ニ自分モ廻燈籠ノ様ニ廻ツ

三、箸―鯉
四、豆―旗幟
一、板―燈籠
二、貼―神社ノ鳥井
三、積―宮
四、画―椀
五、箸―門
六、貼―鳥井
七、板―橋
八、貼―椀ニ刀
九、積―舟
十、画―清水寺ノ塔
十二、縫―家
十三、箸―小槌
一、板―燈籠
二、貼―燈籠
三、積―庭
四、画―火竪
五、摺―蝶
六、箸―家形船
七、摺―水鳥
八、豆―植木鉢

○鶏ノ話
物 五
庶 四
修 二
復 一

タラ坊チャンタチ見ラレルヤウニ朝カラ廻リ出シマシタスルト余リ廻ッタ拍子ニ池ノ中へ落チタリ

10/2 〜 10/14

一、鶏
二、忍耐力
三、犬
四、水

一、板—鶏
二、貼—鳥
三、画—竹ノ葉
四、摺—豚
五、箸—猫ノ食用品
六、摺—鳥
七、板—水桶ニ鉢
八、貼—住家
九、画—皿
十、摺—家
十一、縫—鳥籠
十二、箸—鳥籠
十三、摺—鶴

例 オ爺サンノ忍耐力ニ付テ話ス例ヘバ恩物ヲ使フニモ道ニシテ置カズ人ノナス事ハ何処マデモ出来得ル所迄スト云フ事ヲ話ス

○菊ノ絞（忍堪力）
⑤
物 三
庶 二

9/18 〜 9/21

一、花
二、オ黄チャン（黄菊）

一、板—花籠
二、貼—菊水
三、積—花壇
四、画—オ膳
五、摺—菊
六、箸—植木鉢
七、摺—駕籠

菊 桜 花咲春

○大和玉椎ノ話
⑤
物 三
庶 一
修 一

10/16 〜 10/21

一、風
二、国体

一、板—机
二、貼—大木
三、画—国旗
四、摺—風車
五、箸—雪

①或ル所ニ雪・氷・粟ナドアリ其等或ル時話シ居ル中ニ風ノ神ナルモノ来リテ支那ノ満州地方ニ不思議ノ大木アリ風ノ神ハ其ヲ

倒サント計ル③右続キヨリ大木ヲ倒サント行キタルニ色々トナシタル叶ハズ其迄ヲ話ス⑤前ノ続キヨリ皆大木ノ側ニ行ケバ一トナリ皆倒サレテシマヒ遂ニ降参ナシタリ後大和玉椎愈々茂シタリ此所ヲハリタリ⑥大和玉椎日本ノ国体ニ付キテ話ス

○大江山
㉓
物 十二
庶 六
復 五
幼児 二

10/23 〜 10/18

一、大将
二、オ爺サン
三、道
四、門
五、オ姫サマ
六、酒

一、積—八幡宮
二、画—酒ツボ
三、摺—箱
四、箸—奴
五、豆—門
六、板—カブト
七、貼—門
八、積—門
九、画—門
十、摺—儒伴
十一、板—杯ト徳利
十二、貼—杯ト徳利
十三、積—ひじつき 杯ノ台
十四、画—鉢
十五、縫—肘突
十六、箸—刀
十七、摺—カブト
十八、貼—傘
十九、積—宮
二十、画—眼鏡
二十一、縫—ツボ

ここなる門

例 十一月十四日 頼光ノ如キ大将ニ付キテ幼児ノ意見ヲ問答ス

○羅生門

⑱ 幼庶物 復 四一四九

十一月二十四日

不意ノ時後カラヨリ鬼来レバ如何ニスルヤ幼児ノ意見ヲ問フ

11/20

一、門
二、名誉ノ高キ赴意
三、乳母

一、板屏風豆鳥井
二、貼火鉢
三、積門
四、織羅生門
五、画刀
六、摺馬
七、箸箱
八、摺くつ重門
九、積二重門
十、画箱
十一、縫箱
十二、摺家
十三、板家
十四、貼門
十五、摺提灯
十六、縫コッブ
十七、摺屏風
十八、貼皿
十九、積井戸
二十、織井戸
二十一、画山
二十二、摺ふくら
二十三、箸山井
二十四、縫雀ノ門
二十五、摺箱
二十六、画杖
二十七、貼葛藤
二十八、摺燕
二十九、豆鳥籠
三十、板葛藤
三十一、縫山
三十二、箱雀ノ門

○舌切雀

⑪ 物庶修 七二二

12/11〜12/21

一、鳥
二、慾

○桃太郎ノ復習

⑤ 復庶 三二

1/9〜1/12

一、川
二、犬猿、雉

○金持ト貧乏人ノ話

⑭ 物問答修復 八二二

1/13〜2/1

（勧善懲悪人によいことをせよ）

一月二十三日

（修身的なもの）

何事モ始メヨリヨ

キ事ナセバ後悔

スル事ナシ諺ニイ

チバン先ノ杖ト云

フアリ

（幼児との問答）

一月十七日

幼児等ノ如キ場

右ノ如何ニスル

合ニハ意見ヲ問フ

ヤ其ノ十五日

一月二十日

金持ノ人ノ心ト神

様ノ心ヲ話ス其

前ニ此様ナトキノ

幼児ノ心ヲ問フ

○花咲爺ノ復習

⑭ 物庶修 八一五

2/2〜2/17

二月六日

犬ノ今迄爺サン婆

サンニ大切ニシテ

一、摺花
二、箸籠
三、貼鎌
四、積犬小屋
五、織納屋
六、画割木
七、摺家

桜犬
花咲爺

一、積橋ト舟
二、画魚
三、縫矢
四、箸犬小屋
五、摺豚家
六、摺鉢
七、摺人ト舟
八、板家
九、貼膳
十、画ち
十一、摺馬居
十二、縫鳥
十三、摺馬
十四、箸馬のくら

○ガッテ居タレバヨ

セバヨキヒアリ

セバヨキ事ヲナ

ノ如キ即チ報

之ナリ

爺サンハ雀ヲ可愛

ガッテ居タレバヨ

キ報セヨナシタリ

十二月十九日

何事モヨキ事ヲナ

ラル御恩ヲ忘ルベカ

ザル御恩ヲ忘ル

ヲ忘レズ故ニ児童

ヲ母ヨリ受ケタ

等父母ヨリ受ケタ

十二月十六日

雀ハ爺サンノ御恩

ニ十日

修身訓話的なもの

貰ッタ御恩ヲ返ス			
二月八日	八、縫—家		
此ノ如キヲ話ス	九、箸—花		
	十、摺—花		
隣リノ爺サハ常ニ四郎ヲシカリ付ケル故ニヨキ報ヒ	十一、豆—皿		
	十二、摺—鉢		
ヲナサザリキ	十三、画—臼		
二月十三日	十四、箸—梅		
	十五、摺—繻絆		
オ爺サンノ四郎ヲ愛スルヲ故ニ幼児ノ如キナリ母愛スル此ノ如キ話ス	十六、貼—杵うす		
	十七、豆—植木ノ花		
○勝々山	一、板—家		
	二、貼—茄子		
⑫物七	三、積—水桶		
庶五	四、画—臼		
	五、摺—豚		
	六、縫—膳		
	七、箸—椀		
	八、摺—母婆サン		
	九、板—テヲ殺シテタル流シ		
	十、貼—兎		
	十一、画—火燃石		
	十二、箸—縫—火燃石		
	十三、摺—唐辛鉢		
	十四、貼—柿ス常リ鉢		
	十五、箸—ひき臼		
	十六、摺—かき		
	十七、貼—ツボ		
	十八、積—門		
	十九、織—門		
	二十、画—箱		
○猿蟹合戦	一、猿	2/19〜3/3	
	二、蟹		
⑥物三	三、柿	3/12〜3/17	
庶三	一、山門	3/19〜3/20	
○大江山ノ復習			
②庶一			
○羅生門ノ復習	一、馬	3/21〜3/22	

○猿蟹ノ復習	一、蟹、猿	3/23〜3/24	
②庶一	二、摺—馬		
	一、箸—柿ノ木		
	二、摺—柿		
②物一			
○舌切雀	一、鳥	3/26〜3/27	
庶一	二、積—門		
物一	一、板—鳥籠		
○勝々山復習	一、摺—舟	3/28	
	(以上第四十五週まで)		

明治三十三年度

一之組保育案(自週至第四十週三月九日)

説話	期間	庶物話	手技	唱歌
○牛若丸	4/9〜5/5	一、戰	一、画—カサ	兵隊
物十		二、雪	二、摺—かぶと	
庶八		三、剣術	三、貼—かさ	軍艦
㉔復四		四、橋	四、摺—雪(美魔式)	我海軍
教訓二		五、頭巾、鎧、薙刀	五、箸—しない	
		六、扇子	六、積—橋	
		七、宮	七、摺—塔	日本男児
		八、盥	八、画—月夜	
		材料種類効用		
四月三十日及五月十日ヨリ父ノ仇ヲ討タンケイコ常ヨシリ剣術ヲナスタル甲斐アコトニヨリテ何ナル強キモノ如何ナル出合ヒ少シモ恐ニ故ニ何事モ思ハ常ヨリ思ヒ掛トナク勉強ナリ			九、織—橋ト舟	
			十、板—橋	
			十一、貼—橋	
			十二、箸—薙刀	
			十三、縫—扇子	
			十四、豆—扇子	
			十五、板—燈籠	
			十六、貼—燈籠	
			十七、積—宮	
			十八、摺—額	

○燕と鯉幟の話
⑩復修（因果応報）庶物 二二 二四

○俵藤太
⑬復庶物 二七 十

○狼ト忠僕ノ話
⑧復幼児のはなし 庶物 一二 四一

○五月二十五日より土曜日は談話なし
○六月四日より手技は一種づつ

註

5/7〜5/18
一、鯉
二、燕

5/21〜6/16
一、蛇
二、橋
三、鯉
四、百足
五、魚
六、米
七、馬

6/18〜6/26
一、馬
二、狼
三、車

九、積—舟
十、画—浜ト松
十一、貼—蒸気
十二、豆—旗
一、積—門
二、摺—燕
三、画—魚
四、貼—魚
五、箸—庖丁
六、縫—マナイ

一、画—弓タ
二、板—橋ト舟ニ適
三、貼—橋ト舟当ナ
四、積—唱歌アル
五、摺—虫橋
六、画—矢ニ付キ
七、豆—矢ト操練ノ
八、積—汽車ト歌ヲ教フ
九、摺—蒸気ト舟
十、画—湖ト舟
十一、摺—蛙
十二、箸—山
十三、貼—俵
十四、箸—旗
十五、摺—馬車
十六、積—馬車
十七、豆—車
十八、摺—馬車々

例

月①一人ノ貴人妻娘ト僕ヲ連レ遠方ニ行キシニ晩ニ或ル村ニ着セシカドマダ時早ナレバ今一ツ先ノ村迄行カントテ村宿ノ主人ノ言フヲ聞キ入レズ馬車ノ馬ヲ付カヘサセ出立スル所迄ヲ教フ

火②前週水曜日ニ馬ノ庶物ヲナシタリ其復習ヲナス次ニ狼ノ画ヲ見セ其ニ付キ話ス

水③宿ノ主人ハ次ノ村ヘ行ク道ニハ狼ガ沢山出テ来テ人ヲ害スル ト云ヒシガ果シテ無数ノ狼来リテ一行見カケテ追カケル迄

木④車ノ庶物、車ノ名称、効用等ヲ話ス

金⑤貴人ハ驚キピストルヲ出シ遂ニ払ハントスルモ無数ノ狼ナレバ力及バズ遂ニ一頭ノ馬ヲトキ与ヘシキ足ラザレバ又一頭ヲ与フ然レドモ之ニテモ足ラズ尚追ヒカケ来リ如何トモスル能ハズ其迄ヲ話ス

土⑥此週教ヘシ話ヲ覚ヘ居ル子供ニ話サシム

月⑦後詮方ナクシテ僕遂ニ身ヲ狼群ノ中ニ投ジテ主人ヲシテ逃レシム

火⑧前週教ヘシ所ヨリ終リ迄ヲ復習ス

※　※　※　※

児童発達講座②は筆者の御病気により今月は休講といたします。悪しからず御了解ください。

「幼児の教育」誌について

「幼児の教育」は、本年で六十二年の長い歴史をもち、幼児教育の専門雑誌です。本誌は特色として、次の点を挙げることができます。

1、本誌は最新の学問の成果を幼児教育の現場にとりいれることを心がけています。

現代の学問研究は日進月歩していますが、最新の学問研究と保育現場とはとかくお互いにはなれがちです。とくに、児童学、心理学、教育学、精神医学、カウンセリング、グループダイナミックスなどの最近の新しい進歩を消化しながら、実際の幼児教育に生かす道を考えることは本誌の使命と思っています。

2、幼児教育の研究誌としての役割を果すことを心がけています。

幼児教育を進歩させるためには、現場ならびに学者の研究が重要です。現場における諸問題、幼児の発達の問題、保育内容の諸問題など、直接の幼児教育の研究の発展の場としての役割を果したいと願っています。

3、幼児を人間として理解することの重要性を強調します。

学問研究が進むと、とかく全体としての展望を見失いがちです。本誌はひろい観点に立って文学的に、哲学的に、宗教的に幅広い人間観の上に立って幼児の理解を改めてゆくことをつとめています。

4、世界および日本の各地の幼児教育界の動向を示そうとしています。

以上の趣旨に沿って、本年もいろいろの新しい編集の試みをしました。とくに本年は幼児の発達に関する講座を設け、もっとも新しい知識を学ぶ機会をつくりました。また、もっと現場の実際と学問研究とを結びつける努力をしたいと思っています。

現場の研究でも、あるいは調査研究でも、こんな研究をしたという試みがありましたなら、どうぞ原稿をお寄せください　幼児教育が、理論的にも、実際的にも、正しく伸びてゆくことは、読者諸氏とともに本誌の願うところであります。

幼児の教育　第六十二巻　第二号

二月号　©　定価六〇円

昭和三十八年一月二十五日　印刷
昭和三十八年二月　一　日　発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

幼児劇12か月

1年間の素材として12か月に分け、みんなでできるようにくふうしてあります。

湯山昭先生による新しい曲がつけてあり、すぐ使えます。

—目次の1部—

4月　なかよし
　　たんぽぽの　たび
5月　ひよこの　ひいちゃん
　　きんたろう
6月　おはなと　いもむし
　　あめの　こ　ぴっちい

A5判　定価 320円

友田静恵著

発行　フレーベル館

新製品ご紹介

軽くて丈夫で美しい

キンダーパスボール

6色セット‥‥1組2,800円
(空気入れポンプ付)

特色

- 非常に丈夫です。
- 美しい色彩です。
- 空気入れが簡単です。
- 軽くて，良くはずみます。
- やわらかくて，よい感触です。

(個別売)

ボール1個420円　ポンプ1台300円

発売　フレーベル館

別冊

キンダーブック

物語絵本

（季刊）

冬の号

そんごくう

作・邱　永　漢
影絵・藤　城　清　治

別丁ペアレンツコーナーつき
B5判　20頁　50円

坂印刷株式会社印刷

キンダーブック

3月号予告

おっぺると　ぞう

宮沢賢治の名作〝オッペルと象〟を絵本にしました。武井武雄先生の絵三越左千夫先生の文は，原作の味をそのまま子どもの心に伝えます。

A4判　16頁　付録つき
50円

東京都千代田区神田小川町 3—1

フレーベル館

振替口座 東京 19640 番　電話　東京（291）7781～5